

## 解題

黒木勘藏

淨瑠璃名作集上巻には、義太夫劇の創始時代から元祿の盛時を経ていよいよその最盛期に向はうとするに至る迄の期間の代表的名作を年代順に収載して置いた。本巻はそのあとを受けて、義太夫劇の黄金時代の名篇傑作を始めとして、その後に出でたる代表的名作十九篇を年代順に収める事とした。

蓋し義太夫劇の黄金時代と稱すべきは延享・寛延前後であつたと謂つてよからう。「淨瑠璃譜」の延享二年七月「夏祭浪花鑑」の條に「操り段々流行して歌舞伎は無きが如し、芝居表は數百本の幟連物等數を知らず、東豊竹、西竹本と相撰の如く東西に別れ、町中近國鼓風をなし、操りの繁昌言はん方なし」とあるが、この前後が實に義太夫劇の極盛時代であつたと見て差支ないやうである。而してこれをその作品について見ても亦この期間が最も注目すべく、後世迄舞臺上の生命を有して、操りに歌舞伎に幾回となく繰返されて今日に及んで居る名篇傑作が次から次と作られた時であつた。殊に注目すべきは、從來豊竹座の作者として名聲の高かつた並木宗輔が、並木千柳と名のつて竹本座の作者として竹田出雲・三好松洛等と共に筆を執るに至つた延享二年以後の數年間であつた。即ち本巻の始めに收めた「夏祭浪花鑑」以下の五篇はこの年間の代表作であつて、是等こそ淨瑠璃の名作中の名作と稱すべきものである。淨瑠璃として、はた又我が國戯曲として是等の諸篇は最も勝れて居る事は言ふに及ばないが、その後にも注目すべき作品は決して少くはない。今日

逸舞臺生命を有する作品はこの後、即ち寶曆以後に作られた物に却つて多いのである。自然本名作集中にはそれ等の作品中の代表的名作をも加へたのであるが、それが爲には題材に於ても、結構脚色に於ても、歴史的價値に於ても、又舞臺生命を有する上に於てもそれ〴〵特色を有して居ると見るべきものにして、しかも作者も作品も偏しないやうにと注意して採收するの方針をとつた。

思ふに義太夫淨瑠璃はその總數に於ては無慮六百八九十篇に上るであらう。尤もその中には外題名を傳へるのみで正本の傳はらぬもの、又は刊行されなかつたものもあつて、之を合せれば總數の約一割に達するであらう。而して又その中から近松巢林子の作約九十餘篇を除いた残りの約五百篇内外について見るに、その中には續案改作又は外題替などもある上に、愚作・拙作が甚だ多くして、眞に名篇佳作と稱すべきものは案外に尠いのに驚く程である。故に本名作集上下兩卷中に收めた篇數は、その總數に比しては一割にも満たない程であるが、種々の意味に於て代表的の名作を、しかも年代的に見ても始より終迄に亘つて採集する事に努めた積りであるから、これによつて江戸時代文藝壇の一大異彩であり、又我が國近世戯曲の根幹たる義太夫淨瑠璃の眞髓を把握し、その年代的展開變遷を大觀し得られるであらうと思ふ。

以下、上卷に倣つて所收各篇の解題を試みようと思ふ。

夏なつ祭まつり浪な花は  
鑑かぎ

延享二年七月十六日竹本座初日。作者並木千柳・三好松洛・竹田小出雲。

外題の角書に示してある關七九郎兵衛・釣船三姉・一寸徳兵衛の三人及びその女房等を主要人物とし、これ

に敵役大島佐賀右衛門・三河屋義平次等を配して、主として大阪侠客の達引を描いたもので、九段から成つて居る。世話物九段續はこれを以て始めとする。

本曲の荒筋はかうである。泉州濱田の家中玉島兵太夫の伴磯之丞は堺の遊女琴浦に溺れて放埒を極めた結果勘當された。兵太夫の恩を受けた堺の魚賣團七九郎兵衛は磯之丞の世話をして琴浦と添はせようとする。然るに磯之丞の戀敵大島佐賀右衛門は琴浦を手に入れようとして奸策を弄し、且その後援者として侠客一寸徳兵衛が居る。自然團七と徳兵衛との達引となつたが、徳兵衛も亦玉島家の恩顧を受けた者とわかり、二人は兄弟の誓をして磯之丞琴浦の爲に盡す事となり、徳兵衛の勇釣船三嬉の許に兩人をかくまふ。徳兵衛の女房お辰は磯之丞を徳兵衛の郷里備中玉島へ送り届ける役目を果たすために自ら美しい顔に焼鐵を當てて醜婦となつて世の疑惑を避ける用意をして旅立つ。然るに團七の勇三河屋義平次は琴浦を勾引して大島に渡して金にしようとする。團七はあらゆる侮辱を忍んで哀願したが聽入れぬので遂に勇を殺して一旦玉島に遁れたが自ら名のつて繩目にかゝり、大島は舊惡露顯し、磯之丞は歸參が叶ふといふに終る。六段目松屋町三嬉内、七段目長町裏が全篇の山である。

さて本曲の主人公たる團七九郎兵衛の實説については明かでない。種彦の「雅俗隨筆」には、團七九郎兵衛の親殺しは元祿十四年九月廿六日、千日前にて曝さると見えて居るが、元祖片岡仁左衛門が、既に元祿十一年の一月から翌十二年春にかけて大阪の片岡座で「宿無團七」の芝居を演じて大當りを取つて居るのによつて見れば種彦の説も信じ難い。本曲初演當時の番附の口上書には次のやうにある。

魚賣團七高津發骨宮長町裏にて勇を殺し候は四拾年以前の儀に御座候是迄狂言には仕候へ共いまだ淨る

りには仕らず候ゆへ始終の實説を承合此度新作に取組申候(下略)

とある。本曲初演の延享二年から四十年以前といへば寶永三年であるが、これではいよゝ年代が合はない、これより更に十年溯れば元禄九年となるのであるから、この四十年は恐らくは五十年の誤ではなからうか。それは兎に角、本曲は仁左衛門の「宿無團七」を本として新に脚色したもの、相違ない事は、既にこの芝居に團七の外に徳兵衛も三ぶも團七女房も出てゐるので推測されるが、この芝居を出さうとする動機を作つたのは、類似の事件があつた爲かと推察される材料がある。それは濱松歌國の「攝陽奇觀」巻六の長町裏勇殺事實と題する次の記事である。

延享元年の冬泉州堺の魚うり博奕の出入にて長町の悪漢を長町裏にて殺害す。折節其年は雪深く、殊に其頃は當世、如く人家もなき野原なれば死骸を雪に埋み置し故、此事誰あつて知る者なかりしが、翌年の春雪



以上

**大更竹中義定**  
**座奉行田出雲板**

劇團... 延享元年... 長町裏... 勇殺... 實事... 記... 録... 也... 此... 演... 目... 録... 也... 延... 享... 元... 年... 冬... 泉... 州... 堺... の... 魚... う... り... 博... 奕... の... 入... 出... 入... 際... に... て... 長... 町... の... 悪... 漢... を... 長... 町... 裏... に... て... 殺... 害... す... 折... 節... 其... 年... は... 雪... 深... く... 殊... に... 其... 頃... は... 當... 世... 如... く... 人... 家... も... な... き... 野... 原... な... れ... ば... 死... 骸... を... 雪... に... 埋... み... 置... し... 故... 此... 事... 誰... あ... つ... て... 知... る... 者... な... か... り... し... が... 翌... 年... の... 春... 雪...

同... 演... 目... 録... 也... 延... 享... 元... 年... 冬... 泉... 州... 堺... の... 魚... う... り... 博... 奕... の... 入... 出... 入... 際... に... て... 長... 町... の... 悪... 漢... を... 長... 町... 裏... に... て... 殺... 害... す... 折... 節... 其... 年... は... 雪... 深... く... 殊... に... 其... 頃... は... 當... 世... 如... く... 人... 家... も... な... き... 野... 原... な... れ... ば... 死... 骸... を... 雪... に... 埋... み... 置... し... 故... 此... 事... 誰... あ... つ... て... 知... る... 者... な... か... り... し... が... 翌... 年... の... 春... 雪...

初演の時の番附

解けて右の死骸出たれども、日數經し事なれば、誰が所爲とも相知れざりしが、天網遁れがたく、些かの事より露顯に及び、召捕れて死罪に行はれし、此事實を竹本座の淨瑠璃作者並木千柳筆作して舊冬の雪中の事を轉じて時候を夏とし、其年の秋芝居に夏祭浪花鑑と題し堺の魚うり團七九郎兵衛に筆勇の義理をからみて長町うらの段は高津祭の宵宮にて俄御輿に紛れ込みて札の辻八丁目へ歸る趣向はこれ作者の發明といふべし。

仁左衛門の「宿無團七」の筋が分らないから、件の事件がどの程度迄本曲に作り込まれて居るかを知らぬ事は出来ないが、少くともこの事件が動機となつて本曲が作られたとは言ひ得るであらう。

また本曲第六冊目徳兵衛女房お辰焼鐵の趣向は了然禪尼が白鷗和尚に從學せんが爲に自らその美しい面を焙いた話を轉用したのであり、八冊目住吉の場で、徳兵衛團七達引の間の文句に、其間抜きさいたる鬘抜かうと床の床几に上足打頼草入から出す鱗なまこなんぼらふときせんさくなりとあるのは、名古屋の南方鱗といふ名物の毛抜、これは孔明の出師表に深く不毛に入りて今南方を定むとあるのによつて近衛公が命名されたといふ由緒のある毛抜を利かせたのであると西澤一鳳は言つてゐる(脚色餘録三ノ下)。

本曲は大好評であつて直に歌舞伎に入り同年八月、京都都萬太夫座で演じ、十二月には大阪の三座も競争の形で出し、兩來操りでも歌舞伎でも幾回も繰返されて居る。それは作柄の勝れて居るのによるのは言ふ迄もないが、かく人氣を呼ぶに至つたのは、人形遣の吉田文三郎の演出上の新工夫に負ふ處も少くなつた。「淨瑠璃譜」の本曲の條には次のやうにある。

是當芝居はじまりてより世話物九段續はじめなり。頃しも暑氣の氣をとり、四つ目より八つ目迄始めて

人形衣裳帷子を着せる。これ三代前吉田文三郎趣向にて、七册目長町裏の段本泥にて人形水をかくる事を思ひ付しは吉田文三郎なり。此人操りにかけては人形を持出れば人の如く、右狂言にては役團七九郎兵衛一寸女房おたつを使ひ、おたつ姿は今に歌舞伎にても桔梗の帷子黒纏子の前帯淺黄の綿帽子より外を着ればおたつのやうに見えぬも不思議、又團七九郎兵衛人形のわけ爰に記す。

筑後はじまりてより人形頭を打つ事名人にて笹尾八兵衛といふ者あり。今も操りにて黒人ども能き頭を八兵衛といふが樂屋の符牒なり。此八兵衛一生の内國性爺の頭、安大人の頭、日本振袖始素盞鳴尊の頭其外新淨瑠璃によつて數多頭を作りし故、其狂言の名を以て記す。大塔宮齋藤の頭、鼎軍談にて孔明かしら、用明天皇檢非逆使頭その外人形頭の異名數知れず。右夏祭團七の頭國性爺といふ敵役の頭を糸鬘となし、薄肉に塗らし、花色のぎん付の緋入、やげんの紋、三つ目床の内より大鳥佐賀右衛門の手を捻ち出る所新しく甚だ妙なり。六つ目より茶の碁盤縞を着せ、徳兵衛頭は素盞鳴の頭を白塗厚裳にて、紺の碁盤縞を着せし故、今に團七の狂言この通りの姿でなければ舞伎操りにても團七徳兵衛と見えぬ。旅芝居津々浦々唐土迄も外の衣裳はやりつけになれど、此團七縞徳兵衛の動かざるは、三代前吉田文三郎名人といふべし。釣舟の三姉は安大人の頭を白髪となし、赤小豆色に塗り、照柿の帷子、龍の爪にて玉をつかんで居る紋所舅儀平次は齋頭の頭、黄色の帷子、今に於て替らざるは、定規の板に押したる如くなり。(この人形口繪参照)

名人文三郎の新工夫の後に及した影響の顯著な一例であると共に、人形に帷子を着せてこれを使ひこなした彼の手腕の非凡さに驚かすにはゐられぬ。

本曲は歌舞伎に入つて行はれたと共に、江戸に於ては後になつて、色々の書替へも作られたが、又一方大阪では、岩井風呂の湯女殺しを取入れて仕組まれた「宿無闇七時雨傘」(並木正三作)が明和五年八月から道頓堀の竹田芝居で演じられ、これ亦名高い作の一つとなつたが、これは文化三年八月には道頓堀大西芝居で操りに仕立てて興行され、その後も數回繰返されてゐる。

作者並木千柳(宗輔)の小傳は上巻解題「苅萱桑門筑紫轡」の條に述べて置いた。

すがはら でんじゆ てならひかみ  
菅原傳授手習鑑

延享三年八月廿一日から竹本座興行。作者竹山出雲・並木千柳・三好松洛・竹田小出雲。

延寶九年(天和元年)六月刊行の宇治加賀掾の段物集「大竹集」の中に「虎巻」と題し「菅丞相 亂曲」と見出しをつけた短篇が載つてゐる。菅公が左大臣時平の爲に讒せられて筑紫に流され、恨をのんで太宰府に薨じ、遂に雷神となつて時平を取殺し、のち北野に天満自在天神と祭られるまでの事を簡明に綴つてある。その中に菅公は父母共になき天降り人であることも、「梅は飛び櫻は枯るゝ」の歌も、飛梅の奇瑞も作り込まれて居り、殊に叡山性空坊の許の柘榴火の條は割合に詳しく、ほゞ謠曲「雷電」を踏襲してゐる。短篇ながら纏つてゐる。同じく加賀掾の正本として「天神御本地」の外題が傳はつて居るが、未見の書であるから本曲との關

虎巻菅丞相

亂曲

夫豈<sup>カ</sup>國<sup>ノ</sup>ノ神<sup>カ</sup>心<sup>ニ</sup>に<sup>テ</sup>何<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>お<sup>カ</sup>ろ<sup>ク</sup>久<sup>ク</sup>も<sup>カ</sup>た<sup>カ</sup>。  
つ<sup>ニ</sup>ま<sup>テ</sup>て<sup>テ</sup>天<sup>ノ</sup>海<sup>ノ</sup>天<sup>ノ</sup>神<sup>ノ</sup>心<sup>ニ</sup>に<sup>テ</sup>若<sup>ク</sup>人<sup>ノ</sup>神<sup>ノ</sup>心<sup>ニ</sup>に<sup>テ</sup>お<sup>カ</sup>り<sup>テ</sup>。  
元<sup>ノ</sup>來<sup>ノ</sup>文<sup>ノ</sup>母<sup>ト</sup>とな<sup>リ</sup>て<sup>テ</sup>婦<sup>ト</sup>り<sup>テ</sup>人<sup>ノ</sup>お<sup>カ</sup>て<sup>テ</sup>そ<sup>ノ</sup>あ<sup>リ</sup>。  
あ<sup>ら</sup>ら<sup>し</sup>庫<sup>ん</sup>ど<sup>と</sup>な<sup>り</sup>て<sup>テ</sup>謙<sup>ん</sup>ん<sup>と</sup>人<sup>ノ</sup>間<sup>ノ</sup>ノ<sup>ノ</sup>接<sup>手</sup>。  
愚<sup>フ</sup>御<sup>ノ</sup>方<sup>ト</sup>と<sup>テ</sup>人<sup>ノ</sup>皇<sup>ノ</sup>六<sup>十</sup>代<sup>ノ</sup>龍<sup>ノ</sup>解<sup>ノ</sup>い<sup>い</sup>よ<sup>し</sup>。  
つ<sup>ふ</sup>ふ<sup>ふ</sup>内<sup>ノ</sup>日<sup>ト</sup>右<sup>ノ</sup>大臣<sup>ト</sup>小<sup>ノ</sup>任<sup>ト</sup>て<sup>テ</sup>も<sup>も</sup>色<sup>ノ</sup>閑<sup>ノ</sup>白<sup>ノ</sup>識<sup>ト</sup>。  
よ<sup>し</sup>連<sup>つ</sup>て<sup>テ</sup>天<sup>ノ</sup>下<sup>ノ</sup>國<sup>ノ</sup>家<sup>ト</sup>と<sup>テ</sup>治<sup>め</sup>り<sup>テ</sup>余<sup>ノ</sup>方<sup>ノ</sup>あ<sup>る</sup>時<sup>ト</sup>ハ  
詩<sup>ノ</sup>文<sup>ノ</sup>和<sup>ノ</sup>哥<sup>ト</sup>管<sup>ノ</sup>絃<sup>ト</sup>乃<sup>チ</sup>ち<sup>チ</sup>学<sup>ビ</sup>ひ<sup>テ</sup>乃<sup>チ</sup>こ<sup>ノ</sup>女<sup>ノ</sup>方<sup>ト</sup>  
と<sup>ナ</sup>く<sup>テ</sup>同<sup>ノ</sup>心<sup>ト</sup>を<sup>テ</sup>度<sup>ス</sup>君<sup>ト</sup>此<sup>ノ</sup>補<sup>ノ</sup>佐<sup>ト</sup>ぬ<sup>く</sup>よ<sup>し</sup>ひ<sup>び</sup>ん<sup>ト</sup>此<sup>ト</sup>。



おき。有京乃村平と庵ん。ちと神とて  
神とて。量実乃神云り。上を流乃飛不  
字志川。ながれ。より。外。弟と白波。此。身  
の。し。あ。る。と。君。を。が。ま。み。さ。成。て。と。め。よ。と  
う。あ。ら。ふ。と。さ。ふ。月。乃。未。小。教。と。お。街。乃。月  
十三日に太宰府小恙のふ海士れは。あ。や  
れ。あ。ぞ。も。や。ふ。ひ。り。く。わ。お。六。神。女。に。と。め。ま  
て。し。乃。ら。ひ。あ。ら。磯。乃。見。る。め。と。り。れ。弟  
た。さ。か。ま。さ。に。お。乃。越。さ。秋。又。て。若。れ



去不魏のさあが身といさあしつる心と先  
 一古曲をいれ君ぞとて君くあはれは筆  
 舟ふあつてなをえ是を實乃流を流  
 生るしとあんが<sup>三</sup>思<sup>中</sup>さうた<sup>三</sup>ん<sup>中</sup>古詩と  
 月を女とさう<sup>三</sup>月<sup>上</sup>かち<sup>三</sup>月<sup>上</sup>れ<sup>三</sup>と  
 小物<sup>一</sup>を<sup>ユ</sup>嬉<sup>ニ</sup>な<sup>リ</sup>れ<sup>ニ</sup>魚<sup>ニ</sup>身<sup>ニ</sup>ひ<sup>ニ</sup>と<sup>リ</sup>乃<sup>一</sup>秋<sup>中</sup>と<sup>三</sup>大<sup>中</sup>  
 江乃子<sup>一</sup>里<sup>一</sup>六<sup>一</sup>流<sup>一</sup>を<sup>ユ</sup>此<sup>一</sup>秋<sup>一</sup>ひ<sup>一</sup>と<sup>一</sup>り<sup>一</sup>我<sup>一</sup>来<sup>一</sup>此<sup>一</sup>秋<sup>一</sup>  
 とう<sup>ウ</sup>ら<sup>ウ</sup>な<sup>ウ</sup>を<sup>ウ</sup>久<sup>ウ</sup>長<sup>ウ</sup>篇<sup>ウ</sup>此<sup>ウ</sup>約<sup>ウ</sup>ぬ<sup>ウ</sup>て<sup>ウ</sup>暖<sup>ウ</sup>在<sup>ウ</sup>  
 ぞ川<sup>一</sup>で<sup>一</sup>秋<sup>一</sup>津<sup>一</sup>鴻<sup>一</sup>よ<sup>一</sup>九<sup>一</sup>月<sup>一</sup>十<sup>一</sup>三<sup>一</sup>秋<sup>一</sup>と<sup>一</sup>六<sup>一</sup>太<sup>一</sup>名<sup>一</sup>

月此もやけさし舟と續約と他は練意と  
そくそく先を舟形て菅無公つり此秋ゆ  
妻老と早過乃乃屋まきくま六鶯此形  
むにきさく夢にしむいさ初めあふま  
そたし乃空すしうらあがめ東風ぬ久句  
ひととせよ梅此花あふあきて春あす  
まそと詠じき梅へ不思義であありの  
梅梅の庭上小忽然とさび木か梅へと  
び梅のあけをこれ中に何とぞ松は流色

かろくもんをたけ哥にまを老来れ未乃在  
季社と祝ひし事<sup>神代</sup>をまむひを後世にて  
後者小恨と報せんと大いそ乃法を後  
七月七夜天帝小飲食と事ありし  
かんとめんらと事<sup>神代</sup>をまむひを後世にて  
みてせと延<sup>三</sup>二月廿五日小  
遷れ者<sup>三</sup>と消<sup>三</sup>より<sup>三</sup>の<sup>三</sup>法<sup>三</sup>性<sup>三</sup>行<sup>三</sup>は<sup>三</sup>徳<sup>三</sup>  
比ひえい山延曆寺の所を法性行は徳  
とて貴き人おのすもい人の三伏の夏の

秋五更と未のつらた九急乃忘れ前中  
 此床の色小在の法水とあへて三雲  
 乃月とと海一乃乃に書とわしく也  
 乃乃をなす是誰なるんと思召るを案  
 夫見人の心は二月や故乃五目小を  
 早小とと向へ菅垂相めおりの海也  
 乃やと思召清し入りの源及れ御光殿  
 何事にくるありと菅垂登の乃乃  
 溜るをせに生までせ業れ終る乃乃

せんせん<sup>中</sup>代わると報せん<sup>中</sup>の雷となん  
 時せん<sup>中</sup>せん<sup>中</sup>外<sup>中</sup>し<sup>中</sup>い<sup>中</sup>ら<sup>中</sup>あ<sup>中</sup>り<sup>中</sup>て<sup>中</sup>ま<sup>中</sup>あ<sup>中</sup>い<sup>中</sup>の  
 多<sup>中</sup>勅使あり<sup>中</sup>とて<sup>中</sup>と<sup>中</sup>内<sup>中</sup>表<sup>中</sup>不<sup>中</sup>来<sup>中</sup>り<sup>中</sup>と<sup>中</sup>海<sup>中</sup>  
 比<sup>中</sup>の<sup>中</sup>生<sup>中</sup>と<sup>中</sup>せ<sup>中</sup>と<sup>中</sup>小<sup>中</sup>此<sup>中</sup>忠<sup>中</sup>と<sup>中</sup>な<sup>中</sup>と<sup>中</sup>の<sup>中</sup>報<sup>中</sup>せ<sup>中</sup>ら<sup>中</sup>へ  
 此<sup>中</sup>河<sup>中</sup>か<sup>中</sup>を<sup>中</sup>さ<sup>中</sup>い<sup>中</sup>り<sup>中</sup>と<sup>中</sup>傳<sup>中</sup>と<sup>中</sup>あ<sup>中</sup>る<sup>中</sup>い<sup>中</sup>ら  
 多<sup>中</sup>勅使<sup>中</sup>なり<sup>中</sup>た<sup>中</sup>二<sup>中</sup>度<sup>中</sup>を<sup>中</sup>六<sup>中</sup>果<sup>中</sup>不<sup>中</sup>中<sup>中</sup>勅使<sup>中</sup>  
 度<sup>中</sup>小<sup>中</sup>及<sup>中</sup>り<sup>中</sup>信<sup>中</sup>天<sup>中</sup>乃<sup>中</sup>下<sup>中</sup>卒<sup>中</sup>と<sup>中</sup>れ<sup>中</sup>内<sup>中</sup>王<sup>中</sup>去<sup>中</sup>に<sup>中</sup>  
 あ<sup>中</sup>ら<sup>中</sup>ず<sup>中</sup>と<sup>中</sup>云<sup>中</sup>事<sup>中</sup>中<sup>中</sup>の<sup>中</sup>い<sup>中</sup>ら<sup>中</sup>む<sup>中</sup>と<sup>中</sup>宣<sup>中</sup>へ<sup>中</sup>と  
 菅<sup>中</sup>垂<sup>中</sup>相<sup>中</sup>の<sup>中</sup>沖<sup>中</sup>又<sup>中</sup>の<sup>中</sup>神<sup>中</sup>介<sup>中</sup>と<sup>中</sup>稱<sup>中</sup>と<sup>中</sup>り<sup>中</sup>た<sup>中</sup>也<sup>中</sup>

御亦小ざりると至るなりと。お月元日に  
合しては、くもかみらとて書る小をうと  
を来くは、未まげくろひぬち海らに火縮と  
成て書る小三尺計り、あがら正人ぬ  
去や水比中とむとんてん此種と去也  
巴く火縮のちの消いとや、  
くふたり神此おる時平と元教一禁裏此  
生化爲く也。帝不復小思百天屠の秋此  
末都小野小社と立天満自立天社と



係は明かでない。で、管見の範圍では、菅公關係の史譚や傳説や信仰を本として作られた淨瑠璃としては本曲が最も古いやうである。

どの存まるとあふれしと強り強人との伝  
か肝小老ひしほ一なぶまるとぞかたがた

この菅丞相亂曲に次いで作られたのが近松の「天神記」である。正徳三年二月廿五日から竹本座に上場された。左大臣時平が唐の使者斐文藉と謀つて道眞が夢裡に唐土へ渡つて詩を賦して唐帝から装束を賜つたとは偽にて、實は數年前から彼の國の大臣と内通して日本を滅して彼の屬國としよとの逆臣であると譏奏して太宰府へ流す。時平はその執權笠見藏人をして左遷の途上菅公を失はせようとしたが、公の御臺の恩を受けた時平の隨身秦の兼竹及びその妻十六夜の働によつて難を逃れる。太宰府では白太夫の宮仕を受け、又公に危害を加へようとする惡漢荒藤太(白太夫の總領)は兼竹に取押かれ、兼竹は白太夫の乙娘小梅と夫婦の契を結ぶ事となると、尼が崎の沖で菅公の爲に藏人の矢先にかゝつた姉の十六夜の亡靈が現れる夢幻的の場面などがあつて、天拜山の祈禱から雷神となつて時平一味を震死させ北野に祀られるに終る。前の加賀掾の菅丞相亂曲によつた點もあるが、その他渡唐天神、左遷天神、綱敷天神、栢榴天神等の傳説や信仰を主として、これを近松一流の想と筆とて作り上げたもので、その題名の示す如く菅公とその御臺中心の作であるが、白

太夫及びその子荒藤太小松(十六夜)小梅及び時平兼竹などが主要人物として活動して居る。

本曲は翌正徳四年二月九日から大阪の荻野八重桐嵐三右衛門座に於て「竹本筑後掾正本之通狂言に仕候」と斷り書迄つけて興行して居る。参考としてその番附をこゝに掲げて置く。

さて此の「天神記」を藍本として更に種々の傳説を取入れて趣向を立て技巧を凝して、作り上げられたのが「菅原傳授手習鑑」である。今兩作中の主要人物についてみるに、白太夫は性格の相違はあるが共通の名である。然るにその子供である此の作に於ける松王・梅王・櫻丸は、彼の作の荒藤太・小松・小梅を轉化させたのであらうが、三つ兒としたのには、當時大阪の天満で三つ兒を生んでお上から五十貫文の鳥目を下さつたのを當込んで、「梅は飛び」の歌によつて想を構へて人物を描き別けたものと思はれる。而して彼の兼竹が是の松王に振替へられ、是の松王に當る彼

天神記 近松門左衛門  
宣風坊に小梅がとに裁るある金丸  
吟二素よりうそくは妻あまの  
西曲宮に時兼傳此文一天にり  
かゝりかふふたれをあらも兼竹  
の成徳こそら口がとれあをり  
まじいやくし聖代めあつて

記 兼 天

の荒藤太はこれの宿禰太郎に轉じ替へられて居る。そして松王の女房に千代、梅玉に春、櫻丸に八重を配したのなどは頗る凝つた命名法である。武部源藏は傳内流を聞いた江戸の書家建部傳内から思ひ付いたのであらうが、不義をした彼等夫婦が丞相の御臺の庇護を受けて深くその恩義を思ふのは、「天神記」で兼竹と十六夜との間の不義の兒を御臺が拾ひ上げた恩に感じて丞相の爲に命を捧げるといふ趣向の鱗案である。斯の如く兩作を仔細に比較すれば、その關係は決して淺くない。而も本曲は「天神記」の如く作意を菅公を中心とせずして、その關係者の活動を主としたのは、既に「天神記」がある以上は當然の行き方であるが、その構想は頗る勝れて居る。殊に作者三人が相談の上で持場を定めて、松洛は二段目の切で菅公と刈屋姫との生き別れ、千柳は三段目の切で白太夫と櫻丸との死別、出雲は三段目の切で松王と小太郎との首の別れと、かう肉身の生別死別を三様に描き別けて、しかも互に趣向が侵し合ふ事がなく、それ／＼特色を發

二月九日  
天神記  
菅公  
刈屋姫  
白太夫  
上原利  
村井友成

天神記  
菅公  
刈屋姫  
白太夫

(行興年四體正) 附 番 記 神 天

揮して居るのは他に類例を見ない處である。

全篇を場割りにして見れば、大序大内の段から、口賀茂堤の段で齋世親王と菊屋姫との濡事が後の波瀾の伏線となり、切の筆道傳授の段が四段目の寺子屋へ照應を保つ。跡は門外。二段目は道行、口汐待の段、切は道明寺で杖折檻、八聲鷄、丞相名残の各場から成る。三段目は口が車曳、切は佐田村の賀の祝で、茶筌酒、喧嘩、訴訟、櫻丸切腹と展開する。四段目は筑紫配所の場、天拜山飛梅、北嵯峨の隠れ家、寺子屋とかう別れて居り、今日行はれる松王屋敷の段は後の蛇足である。五段目は大内の場で時平一味の最期を中心とする。

本曲に於ては、四段目の切寺子屋が最も有名であり、又最も勝れて居る事は言ふ迄もない事で、淨瑠璃の時代物を通じて一大系統をなす身代り首賞檢の趣向の代表的のもので、近松以來の諸作者によつて幾回となく試みられたこの趣向が、こゝに至つてその頂點を示したものといつてよい。それと共に又この場の名セリフや名文句にも、前の諸作に負ふものが少くない。例へば「人形かく子はあたまかく、教ゆる人は取分けて世話をかくとぞ見えにける」は近松の「釋迦如來誕生會」第三段榮特手習の條の「覺えぬくせにあて字書く、教ゆる人は頭かく、世話をかくとぞ見えにける」から來てゐる。又首賞檢の場は大體に於て近松の「吉野都女桶」の第三段日口東寺尊氏本陣の場の小山田前司の首賞檢の場の續案であつて、「眼力光らす松王が、ためつすがめつ窺ひ見て」は「近々と立寄り右へ廻り左へ向き、ためつすがめつ見れば見る程、疑もなき我が子の高家」といふ句の作りかへてあり、「生顔と死顔は相好が變るなどと、身代りの贗首、それもたべぬ、古手な事して後悔すな」は「これ前司殿、生顔と死貌とは相好の變るもの」といふ大森の詞の燒直しである。そして源藏夫婦の「五色の息」は「天神記」の白太夫の「五色の涙」から來たのであるらしく、段切れのいろは送りの名

文句は並木宗助(千柳)作の「藤原秀郷倭系圖」(享保十四年)の第四段目の切の一賢女の手本我がいろは、ちりぬるからだをかき抱き、見送る夫の契りはあさき、ゆめみし心地立酒にゑひも、せず京都路に母と、妹は立歸る」の改作といつて筆支なからう。

此淨瑠璃は非常な好評で翌四年三月迄打続けたが、これは作柄の勝れて居る上に、人形遣の吉田文三郎の考案が興つて力あつた事は淨瑠璃譜の記事か之を證して居る。彼が工夫した菅笠相や、松王・梅王・櫻丸の衣裳などは後迄もその様式が守られた程であつた。江戸の豊竹肥前掾座に於ては翌延享四年二月十八日から興行し、江戸町中の手習師匠



(月八年六歴寶) 附 番 舞 原 管

方へ切落札を配つて人氣を煽つたので、これ亦大當りで、秋迄打通した。

歌舞伎で始めて演じられたのは、延享三年十月京都淺尾元五郎座であり、大阪中の芝居では延享四年八月江戸では、中村、市村兩座とも延享四年五月から演じられ、その後度々繰返されて居る。こゝには寶曆六年八月中村座で演じられて好評であつた時の繪番附を示して置く。

淨瑠璃の方面での齣案物としては、「振袖天神記」がある。明和六年正月竹本座上場で、作者は近松半二・近松桃南・松田才二・三好松洛である。菅丞相の生立ちに紀名虎・橋宗岡の叛逆を取合せたものである。歌舞伎の方面では並木正三の「天満宮榮種御供」(安永六年)が名高いものである。

義よし經つね千せん本ほん櫻ざくら

延享四年十一月十六日から竹本座興行。作者竹田出雲・三好松洛・並木千柳。

數ある判官物の戯曲中最も名高いもので、前に述べた菅原や後の忠臣蔵と相並んで最も世に知られて居り、又最も受けのよい作である。外題は「義經千本櫻」となつて居るが、内容は壇浦に於て没落した平家の後日譚といふ方が當つてゐる。頼朝の使者川越太郎が義經に尋問した三ヶ條の不審の第一として、「平家の首の内、新中納言知盛、三位中将維盛能登守教經この三人の首は贖物云々」と言つてゐる。この言葉は實に金篇の伏線を敷いたものである。されば之に應じて屋島の陣を拔出でて高野に登り熊野に詣でた三位中将維盛を吉野下市の館屋彌助に、碇を負つて壇の浦に入水した新中納言知盛を大物浦の渡海屋銀平に、内侍の局を銀平女房に、少女實は安德帝、横河覺範實は能登守教經と、かういづれも變名變装させて世を忍び人目をくらし

つゝ、義經を討取り源氏に復讐しようとする。こゝに當代民衆の探求的興味を喚起すると共に、花と散つた平家の末路を悼む同情の念に或種の満足を與へようとし、併せて血あり涙ある名將義經の面影を浮出させようと企てて居るやうに思はれる。但し作全體を通して見れば、人物の上では義經はワキ役格で、源氏方では忠信と、その姿を借りた狐忠信とが最も重要な役をつとめて居る。發端序詞の「忠なる哉忠、信なるかな信」といふ句も何となくそれを暗示して居るやうにも取れる。

全篇五段の梗概を示せば、第一段大序は「大内の場」で、平家を滅して後白河法皇に復命した義經は、左大臣朝方から、勅説の名の下に、兄頼朝を討てとの謎をかけて初音の鼓を賜る。止むを得ず一生鼓は打たぬ決心で拜領して退出する。中は「北嵯峨庵室の場」で、世を忍ぶ維盛の御臺若葉の内侍は、夫が高野山にあると聞いて六代君と共に主馬の小金吾を併に出立する。これは三段目への照應をなして居る。切は「川連上使の場」である。歌舞伎では大抵こゝから出す。二段目口「伏見稻荷の段」は靜が義經から形見として初音の鼓と着背長を賜る場で、四段目の狐忠信の伏線を敷いたものである。中渡海屋から、切大物浦船車の場。三段目口椎の木から切酢屋の段。四段目は「道行初音の旅」から吉野藏王堂の評議の場があつて、中「狐忠信の段」から、切の横河覺範實は能登守教經と義經との出會となる。五段目は「吉野山の段」で、忠信が義經と名のつて鎌倉方の者と戦つて居る處へ覺範が現れると、忠信は屋島に於ける兄繼信の敵と打つてかゝり、雙方互角の働き、殊に忠信には源九郎狐が附添つて居るので通力自在である。こゝへ河越太郎が元兇朝方に繩をかけて出ると、平家に取つても敵であると覺範の教經がその首を討ち、覺範は忠信に討たれる。

本曲では三段目の渡海屋と四段目の切から五段目の吉野山の段とへかけてが眼目であるから外題にも「大

物船先倉「吉野花矢倉」と角をつけてある。而して渡海屋から碇知盛の段はいふ迄もなく謡曲の「船辨慶」の體案であるが、この趣向を立てる爲にヒントを得たのは「ひらがな盛衰記」の二段目の船頭權四郎内から逆鱗の趣向ではなからうかと思ふ。

次に狐忠信の原據は何か。これより以前に源九郎狐の傳説があつたといふ事は聞かない。寧ろ源九郎狐の名は彌助館と共にこの作に基いたものらしい。愚見では近松の「天鼓」(祿十四年)から想を得たものではあるまいかと思ふ。何となれば「天鼓」では伶人富士丸の家に傳はる名高い天鼓は丹州四松の白狐の御臺狐なる千年劫經たる女狐の革で張つたもので、これを守る多くの狐の中に伊賀の上野の古狐彌左衛門狐とその子彌助狐とがあつて、この二つの狐が働くといふ仕組になつて居る。處が本曲の初音の鼓は桓武天皇の御宇に内裏で雨乞の時に打つ目的で大和國に千年劫經たる牝狐牡狐の革で張つたものである。そして子狐がその鼓の音に引かれて忠信の姿を借り



(年一十政文) 附 畫 本 平



て現れて静の手にあるこの鼓を守るといふ仕組で彼此相通ずる想である。のみならず彌左衛門・彌助親子の名は彼にあつては狐の名であつたのが、此に於ては鮪屋親子の名であるなど、兩作の間に關係を求めても無理ではあるまいと思ふ。それ故初音の

鼓は天鼓から生れたもので、彌左衛門彌助親子狐の名は鮪屋の方へ振替へられた代りに、こゝへ葛の葉と狐葛の葉の趣向を纏案して取合せ、忠信と狐忠信とを働かせたものであると考へる。

この淨りも大當りであつたが、その功勞者の一人たる吉田文三郎の働きについて例の淨瑠璃譜は次のやうに言つて居る、

此時吉田文三郎役、渡海屋銀平・鮪屋彌左衛門・佐藤忠信三役なり、源九郎狐の人形廣袖にて、是に源氏車の

模様だんだらの丸紵、人形頭素速鳴にて、此時はじめて耳の備く仕掛を思ひつきしなり。源九郎ゆゑ源氏車の模様を付けしにはあらず。此趣向最初より狐と見せざる事故玉もつけられず。色々に工夫をなし、右

此の浄瑠璃譜は、源九郎の役、渡海屋銀平、鮪屋彌左衛門、佐藤忠信の三役を演じた。源九郎は人形廣袖の模様に、丸紵の模様を付けしに、最初より狐と見せざる事故玉もつけられず。色々に工夫をなし、右

鼓の型

狐場を勤むる政太夫の紋所源氏車ゆゑ、源氏のゆかりにて源氏車の模様つけし故、今も歌舞伎などには、長上下にて仕れども、どこぞのはづみでは此姿にならねば源九郎狐めかず、是も三代前吉田文三郎仕始めて何國でも此姿でなければ源九郎狐は出来ぬ。

本曲はその後操芝居に於ても幾度となく繰返して演じられたが、又歌舞伎へも移入されて今日迄も舞臺に生命を有してゐる。而して歌舞伎としては、本曲が竹本座で初めて興行された翌年の寛延元年正月伊勢の芝居で山本小平次の忠信、片岡仁左衛門の銀平と覺範で演じられたのが始めであるといふ。次に同年五月五日初日で江戸の中村座で上演、主役は、銀平中村傳九郎、權太・忠信・源九郎狐澤村長十郎、彌左衛門・覺範市川海老藏であつた。一ヶ月後れて同年一月森田座では、銀平・權太中島勘左衛門、辨慶・覺範大谷龍左衛門、忠信・源九郎狐芳澤あやめ等の役割、更に同年八月には大阪中の芝居で銀平・川連市川團藏、靜芳澤崎之助、忠信・源九郎狐川越嵐三十郎、彌左衛門・覺範姉川新四郎等の役割で演じられ、それより三都を始め地方迄も盛んに上演されるに至つた。

江戸では、道行だけは單調を避けて豊後節を用ひた。その主要なるものを左に年代順に列擧する。

明和四年七月	市村座	道行初音旅	常磐津若太夫	狐忠信(市村羽左衛門)	靜(瀬川菊之丞)
安永三年八月	市村座	道行初音旅	富士岡若太夫	狐忠信(嵐 三五郎)	靜(瀬川富三郎)
安永六年四月	森田座	雪 <small>ゆき</small> 風 <small>かぜ</small> 卯 <small>う</small> 花 <small>はな</small> 鱈 <small>たら</small>	常磐津兼太夫	狐忠信(松本幸四郎)	靜(岩井半四郎)

(この曲は好評で、「古忠信」と稱へて後迄行はれた)

天明元年七月 森田座 友義ともよし經初音旅つねはつねのたびね 常磐津芳太夫 源九郎狐(岩井彥次郎) 靜(山下松之丞)

寛政六年五月 河原崎座 時鳥花有里 常磐津文字太夫  
 (作者は増山金八。寛政十年六月中村座再演)

狐忠信(岩井半四郎) 静(小佐川常世)

享和三年八月 市村座 戀中車初音の旅

常磐津喜代太夫 狐忠信(市川八百藏)

静 (瀬川路之助)

(作者は福森久助。好評「忠信」と稱  
 (られて後迄行はれた))

文化五年五月 中村座 幾菊蝶初音道行

富本豊前太夫 狐忠信(中村歌右衛門)

静 (瀬川路考)

(好評、富本名曲の一、通稱「忠信」)

文化八年九月 市村座 道行初音旅

常磐津小文字太夫

文政八年五月 市村座 新曲初音旅

狐忠信(坂東三津五郎) 静(瀬川菊之丞)

狐忠信(關三十郎) 静(尾上菊五郎)

文政十一年三月 河原崎座 菊鷄關初音 清元延壽太夫  
 その他詳しく擧げる煩に堪へない程多い。この中で最も著名なのは、名人二代目富本豊前太夫によつて語り



新曲初音旅

出された「幾菊蝶初音道行」である。これは後に外題も詞章もそのまま清元に移されて、同流によつても語られてゐる。文章は原作「道行初音旅」を多少改めてあるがその語り出しの「戀と忠義はいづれが重い」の名文句はそのまゝ踏襲されて居る。

### 假名手本忠臣藏

寛延元年八月十四日から竹本座上場。作者竹田出雲・三好松洛・並木千柳。

今更解題を加へる必要もない程知れ渡つた作であるが、また書き出せば際限もない程材料も多のであるから、他との釣合上大體を述べるに止めようと思ふ。

先づ義士戯曲の系統を概観しよう。元祿十五年十二月十四日の夜赤穂の義士が復讐の本懐をとげ、翌十六年二月四日一同に切腹を仰付けられた。この絶好の材題を先づ劇化して演じたのは、それより十二日目の事であつた。「古今いろは評林」所引の其角から大阪の某氏へ宛てた手紙の一節に曰く、

此程の一件も二月四日に片付候て甚瞭とりく、花やかなる説も多く候て無上忠臣と取沙汰此節其事ばかりに候境町勘三座にて十六日より曾我夜討に致候て十郎に少長五郎に傳吉いたし候へども當時の事遠慮も有るべき山とて三日にして相止候云々

即ち元祿十六年二月十六日から江戸の中村座で曾我の夜討狂言に托して、この復讐を仕組み、十郎は元祖中村七三郎、五郎には宮崎傳吉が扮したが、僅か三日で差止められたのである。次に出たのが近松の作「碁盤太平記」で、事件より五年目の寶永三年六月である。これについては近松名作集上巻に本文を收め、解題も

添へて置いた。次は寶永七年に大阪篠塚庄松座で興行された「鬼鹿毛武藏鏡」である。作者は吾妻三八、小栗横山の世界で、篠塚次郎右衛門大岸宮内、佐野川万菊力彌大當りであつた。續いて京の夷屋座も萬太夫座も大阪の禰山座も相競つてこれを上演した。のみならず紀海音はこれを藍本として淨瑠璃「鬼鹿毛無佐志鏡」を作つて、正徳三年十二月一日から豊竹座で興行した。これは本名作集上巻に収めてある。このあとを受けて出た淨るりは「忠臣金短冊」で同じく豊竹座に上場されたもので、作者は並木宗輔を主として小川丈助と安田蛙文が加はつて居る。「恭愍太平記」と「鬼鹿毛無佐志鏡」を折衷して更に新工夫を



大目主由良之助

微老師歌川豊春之圖

明自虫

元祖 沢村宗十郎

後年改名長十郎卜成り又助高屋高助ト更

初代宗十郎の由良之助

施した作である。又正本は見ないが、元文三年七月には京都の宇治加賀の操芝居では「忠臣いろは夜討」を出して居る。

轉じて歌舞伎の方面を見ると、淨りりの方面よりは更にその興行は頻繁であつた。「古今いろは評林」に次のやうにある。

其後享保二酉年大阪にて故澤村長十郎大岸となりて、姉川新四郎寺岡平右衛門の役をぞ勤め大當りを得て同十一年の秋大阪嵐三右衛門座にて又も澤長此役をなせど、此時は狂言少し變りて、不破數右衛門に嵐勤四郎勤めしなり。享保廿卯年四月大阪にて中村十藏則ち座本にて大岸宮内の役をなして、此時堀部安兵衛に藤川平九郎、夫より後狂言いろ／＼とかはり作る。或は大岸に姉川新四郎などの勤めし事もあり。後延享四年京都中村衆太郎座本の時、大矢數四十七本と外題して澤村宗十郎大岸役にて六月朔日より初日出して大入を取りしなり、其矢聲大阪にひゞき同じ外題にて市山助五郎宮内の役にて狂言勤めたり。今の假名手本七つ目は此時澤村宗十郎が形と成りて、凡そ其倂を手本と成し來れり。

斯の如く操りに歌舞伎に屢々新作が上演されて、名人の型も出來たあとを受けて元祿十五年の討入より丁度四十七年に當つて作られたのが、「假名手本忠臣藏」である。大體淨りり系統の諸作の長を取つて更に新工夫を施したのであるが、又歌舞伎の「大矢數四十七本」に負ふ處多く、殊に七段目の大星は澤村宗十郎の嚙モデルとした事は「古今いろは評林」の藝評の部にも詳述されて居る事である。かういふ次第で、いはゞ忠臣藏はこれ迄の義士劇の集大成されたものである。それと共に、後の數多くの改作續案物に對して直接間接影響を及して居る。今この忠臣藏を中心として、その前後に如何に多くの義士劇があるかを概観する便宜上、

西澤一鳳の「忠藏類聚大成」の序の中に擧げてある年表を左に引用する。

淨瑠璃	碁盤	太平記	上	下	寶永三戌年五月五日より竹本座作者近松門左衛門
同	忠臣	金短冊	三段	續	享保十八丑年十月朔日より豊竹座作者並木宗助
歌舞伎	鑑櫻	故郷錦	八段	物	享保廿年三月十一日より江戸中村座作者澤村訥子
同	忠臣	いろは軍記	九段	物	享保廿卯年九月十八日より江戸市村座作者津打治兵衛
淨瑠璃	忠臣	いろは夜討	五段	續	元文三年七月十五日より京都芝居作者宇治加賀掾
歌舞伎	粧武者	いろは合戦	九段	物	寛保元酉年九月九日より中の芝居作者並木丈助
同	大矢數	四拾七本	九段	續	延享五寅年七月七日より角の芝居作者並木永助
淨瑠璃	假名手	本忠臣藏	十一幕	寛延元辰年八月十四日より竹本座作者竹田田雲掾	
歌舞伎	泰平	いろは行列	十段	續	寶曆十二年極月十二日より角の芝居作者並木正三
淨瑠璃	難波丸	金雞	十三段	寶曆九卯年五月十四日より豊竹座作者中村阿契	
同	いろは	歌義臣蓋	十一段	明和元申年臘月十五日豊竹座作者中村阿契	
同	太平記	忠臣講釋	讀切十一册	明和三戌年十月十六日より竹本座作者近松半二	
同	通矢數	四十七本	十段	續	明和七寅年十月三日より竹本座講釋忠臣藏寄物
歌舞伎	小袖藏	いろは配	七册	物	明和八卯年四月十一日より京東芝居いろく寄物
淨瑠璃	忠臣	後日嘯	上	下	安永元辰年四月七日より堀江豊竹座作者北脇素人
同	羨方	武士鑑	十幕	安永元辰年四月廿八日より竹本座作者近松半二	

淨瑠璃 いろは藏三組盡續十幕  
安永二己年七月廿八日より曾根崎

竹本座作者近松半二

歌舞伎 爲討うつたりや日本一忠臣鑑七册物

安永三年霜月八日より京因幡藥

師作者辰岡万作

淨瑠璃 忠臣いろは實記續十一段

安永四未年七月十五日より江戸豊

竹座作者福内鬼外

歌舞伎 日本花赤はなはさくらあこのしほがま城隍じやういろは文字四十七段續

安永七戌年正月四日より角の芝居

作者並木五瓶

淨瑠璃 合詞四拾七文字十一段


安永九子年九月廿三日より堀江此

太夫座いろく寄物

歌舞伎 敵討しじふしちじん四十有七人十一幕

天明二寅年正月十九日より京早雲

天竺山本坊後縁  
歌舞伎 忠臣鑑七册物  
師作者辰岡万作



第一  
第二  
第三  
第四  
第五  
第六  
第七  
第八  
第九  
第十  
第十一  
第十二  
第十三  
第十四  
第十五  
第十六  
第十七  
第十八  
第十九  
第二十  
第二十一  
第二十二  
第二十三  
第二十四  
第二十五  
第二十六  
第二十七  
第二十八  
第二十九  
第三十  
第三十一  
第三十二  
第三十三  
第三十四  
第三十五  
第三十六  
第三十七  
第三十八  
第三十九  
第四十  
第四十一  
第四十二  
第四十三  
第四十四  
第四十五  
第四十六  
第四十七  
第四十八  
第四十九  
第五十  
第五十一  
第五十二  
第五十三  
第五十四  
第五十五  
第五十六  
第五十七  
第五十八  
第五十九  
第六十  
第六十一  
第六十二  
第六十三  
第六十四  
第六十五  
第六十六  
第六十七  
第六十八  
第六十九  
第七十  
第七十一  
第七十二  
第七十三  
第七十四  
第七十五  
第七十六  
第七十七  
第七十八  
第七十九  
第八十  
第八十一  
第八十二  
第八十三  
第八十四  
第八十五  
第八十六  
第八十七  
第八十八  
第八十九  
第九十  
第九十一  
第九十二  
第九十三  
第九十四  
第九十五  
第九十六  
第九十七  
第九十八  
第九十九  
第一百



座作者並木正三

淨瑠璃 太平たいへい きぎしんのいしづ 記義きぎ 匠しゅ 礎いしづ 十册 物

天明四辰年正月二日より堀江此太

夫座作者黒藏主

同 廓景色きざ 雪の茶會ちやのゆ 十一段

天明七末年九月廿一日より豊竹座

作者梅の下風

歌舞伎 いろは假名四十七調なごよろ 十一册

寛政三亥年九月十一日より角の芝

居作者奈河七五三助

淨瑠璃 鼻手はなて 本給ほんき 命藏いのちくら 九幕

寛政五丑年九月晦日より堀江此太

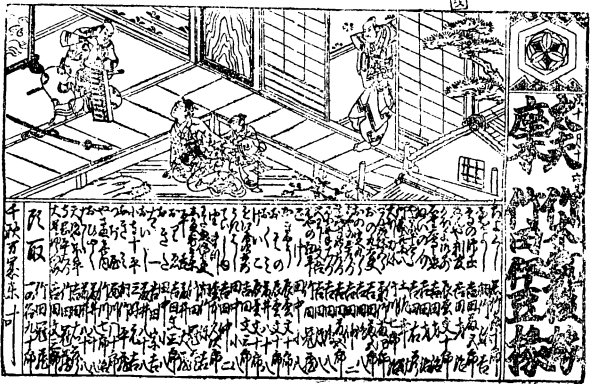
夫座いろく寄物

歌舞伎 忠臣 双葉藏 清書九册

寛政五丑年十一月七日より中の芝

居作者辰岡万作

同 義臣傳讀切講釋 十一册



(釋 講 匠)

寛政六寅年十一月廿二日より中の芝居作者並木五瓶

淨瑠璃 扇矢數四拾七本 いろは假名四十七段續 寛政九巳年三月十五日より中の芝居作者辰岡万作

同 忠臣 兩國 織 十一幕 寛政十年五月五日より江戸森田座作者櫻田治助

淨瑠璃 忠臣二度目 清書 續十一段 寛政十年三月十一日より江戸豊竹座作者烏亭焉馬

歌舞伎 名産赤穂花鹽 十一册 寛政十年九月十三日より江戸市村座作者福森久助

淨瑠璃 忠臣一力祇園曙 九册物 寛政十年八月十五日より堀江此太夫座作者芝屋芝叟

歌舞伎 繪本忠臣藏 十册物 享和三亥年七月廿二日より大西芝居作者近松徳三

淨瑠璃 假名手木義士の書添 十三段 享和三亥年八月十九日より堀江此太夫座作者屏風裏形

歌舞伎 いろは歌響櫻花 四十七册 文化三寅年正月廿一日より角の芝居作者近松徳三

同 以呂波歌櫻花秀逸 十一首 文化七年五月九日より曾根崎芝居作者奈河晴助

同 大石摺櫻花短册 拔萃十三枚 文政五年三月十日より中の芝居作者奈河晴助

同 太平記士鑑 十一幕 天保六未年十月三日より角の芝居作者西澤一鳳

同 花葛蒲いろは連歌 四十七段 天保十二丑年五月十日より江戸市村座作者西澤一鳳

同 紅楓いろは文庫 十一段 天保十三寅年七月廿一日より角の芝居西澤一鳳

同 いろは藏双合鑑 十册物 天保六未年三月四日より伊勢古市芝居いろは寄物

同 裏表忠臣藏 幕なし廿二段 天保十一年三月七日より江戸河原崎座作者三升屋二三治

同 大石摺義士法帖 十一册 天保年間未だ出淨るり近々出版作者西澤一鳳

同

増補裏表忠臣藏 幕ありなし廿二段

天保十五辰年三月七日より角の芝

居作者西澤一鳳

淨瑠璃忠臣國字いろははたごへ譬たごへ四十七枚

天保年間の作讀淨るり近々出版作

者西澤一鳳

以上は強ひて義士の數に因んで四十七篇を選び、且つそ  
の中へ自分の作を多く加へようとした爲に、漏れて居る  
作も少くない。例へば淨るりの「鬼鹿毛無佐志鏡」の如き、  
歌舞伎の「太平記さゞれ石」「豊年栄代藏」の如きこの一例  
である。而して又歌舞伎に於ては天保以後に於て新作さ  
れたものも亦勿論少くなく、これを拾つたならば二十篇  
以上になるかも知れない。今更ながらその數の多いのに  
驚かされる。この中淨るりとしては「恭盤太平記」「忠臣金  
短冊」「假名手本忠臣藏」「太平記忠臣講釋」が勝れて居り、  
殊に忠臣藏が群を抜いて歓迎される事は言ふ迄もない。  
大阪の主要な操りて慶應末年迄に繰返されただけでも七



忠臣國のおきり番附

十餘回である、全國に於て今日迄に果して何回繰返された事であらう。



附番行興座村中夏年二延寛

忠臣蔵が斯く迄世に歡迎された原因としては種々の條件を挙げ得るであらうが、その第一は作柄の勝れて居る事であると思ふ。義士の顛末は大抵の人が知つてゐるので、その中から成るべく劇化して成功しきうな部分を巧みに抽き出し、又この忠臣蔵より前に興行された諸作を土臺として、一般觀衆の有つその豫備知識を利用し、筋の推移は成るべく陰に置いて、一見聯絡の無きさうな異なる場面を示して、しかもその間に隱微の有機的關係を保たせて居る。即ち大序は大時代風の莊麗な鶴が岡の場に始まり、次に大名生活の一斑を示す松代諫言から、刃傷、切腹といふ物凄しい場面に移り、それより一轉して山科街道の二つ玉から寂れた山科の農家に於けるおかるの身賣、勘平の切腹といふ悲劇的場面が展開されたかと思ふと、次は忽然と轉じて華やかな祇園一力の揚屋の紅燈綠酒の場となり、こゝに義士の棟梁大星を繞る色々の人物を配

して、その強烈な色彩の間に底光りのする大星といふ大人物の片鱗を示し、又々轉じて旅路の嫁入より、義

のために夢のやうな青春の可憐なる戀を捨てねばならぬ悲しき場面から、子を思ふ慈父としての本藏の最期となり、更に轉じて天川屋の場から討入迄が十一段に仕組まれて居る。かくして當代社會に於ける各階級各方面の生活相が次から次へと展開されて行く間に、大星を始めとして義士の面々を廣汎なる範圍に亘つて活動させると共に、怒り易い大名氣質の人物や、地位と特權とを利用して放恣貪慾の限りを盡す好物を配し、その思慮分別に富み只管主家を大切に思ひ、又その血氣に逸るを止めようとして却つて誤解されて非業に終る地味な人物も大切な役目をつとめ、夫のために身を賣る女、忠義の爲に身の卑賤を顧ずに働く健氣な足輕、男と見込まれて然諾を重んじ妻子を犠牲とするも厭はない町人などのやうな種々異なる人物を活動せしめて、結局復讐の大目的へと歩一步進ませてゐる。かくして有機的にして、しかも各場面毎に特殊の價値を有つ作柄となり、對照の妙を示し、重疊たる波瀾を描いてゐる。これが忠臣藏の一特徴であつて、や



紙張繪本正の「入幕」

がて質演して一般に歓迎される一原因であらうと考へる。

此淨瑠璃は大當りて興行を續けたが、その年の十月になつて、九段目山科閑居の場を受持つて好評を博して居た竹本此太夫と人形遣の吉田文三郎との間に演出上の意見の相違の爲に衝突を來して、此太夫は島太夫百合太夫等と共に退座したので、その代りに内匠太夫(豊竹上野少掾)長門太夫・千賀太夫等を入れて十一月迄興行を繼續した。歌舞伎では同年十一月一日大阪の嵐座で由良之助・勘平嵐三十郎、石堂・義平姉川新四郎本藏・九太夫片岡仁左衛門等の役割で演じたのが始めてある。江戸ではその翌寛延二年夏三座競争の形で上演していづれも大入であつた。

清元で行はれる「道行旅路の嫁入」俗に「八段目」又は「おかけ参り」と呼ばれる淨るりは、原作の八段目道行へおかけ参りと女商人とをからませたもので、三升屋二三治の添削で天保元年四月十九日から市村座で上演された。又同流の「道行旅路の花祭」は天保四年三月五日から河原崎座で興行の裏表忠臣藏の三段目裏のおかる勘平の道行で、俗に「落人」と呼ばれる。これ亦三升屋二三治の作で、今日も行はれてゐる。その他の豊後節で道行を語られたものも色々あつたが略する。

### 雙蝶々曲輪日記

寛延二年七月廿四日から竹本座上場。作者は竹田出雲・三好松洛・並木千柳。

外題の角書に「關取の濡髪、名取の放駒」とあつて、外題にも「雙蝶々」とつけてあるので推測し得られるやうに、濡髪長五郎と放駒の長吉とを主要人物として、これに山崎與次兵衛親子、傾城あづま、南與兵衛

等を取合せて脚色した淨瑠璃である。

濡髪は五郎の實説については、武攝雙蝶秘録(攝陽奇觀所引)に次のやうに見えてゐる。

上州沼田城主土岐丹後守殿(享保中大阪御城代なり)江戸家來岩村長右衛門といふもの故あつて浪人して城州八幡に蟄居し、都倉與惣兵衛と改名して手跡の指南を業とす、其子長五郎生得角力を好み、同所荒石斧右衛門といふ角力取の養子と相成り、荒石長五郎と名乗りけり(八幡の荒石斧右衛門は其頃角力仲間の親仁分のよし)此長五郎は若氣の血氣に喧嘩口論を好み、平常に紙を水にて浸し、頭を手拭にて捲く、尤もこれ用意の宜しきなり。濡れたる紙は双物とても通る事なし、異國にては紙具足とて水にて數枚の紙を身に張りける由、此理を以て長五郎も常に濡紙を額にあつる故に荒石といふ名乗はあれども、諸人ぬれがみくくとぞ呼びける(濡髪にあらざるぬれ紙なり)土岐丹後守殿大阪御城代の節濡紙長五郎難波裏にて服部惣左衛門といへる侍と喧嘩をなしつるに、右惣左衛門を殺して親里八幡に身を潜みけれども天網遁れがたく入牢に及ぶこれ享保中の事なり。

次に放駒長吉の實説は明かとはいへないが、大阪大寶寺町の搗米屋丸屋仁左衛門の養子で、養女のお長と許嫁の仲であつたが、家業を顧ずに男達の仲間入りをして居たものであらう。そしてその實父が果して正徳享保頃大阪市中で持囃された小野屋膏藥を賣つた道頓堀中橋北詰の作兵衛といふ者であつたといふのが事實かどうかは解らないが、兎に角長吉をかういふ關係の者として、前の力士長五郎と共に主要人物として先づ淨りに仕組まれたのは「昔米万石通」である。

「昔米万石通」は西澤一風・山中千柳の合作で、享保十年正月二日から「女蟬丸」の切として豊竹座で興行され

た上中下三卷より成る世話物である。「雙蝶々曲輪日記」の成立を知る上に於て必要な作であるからその梗概を簡単に述べて置く。大阪で評判の小野屋膏藥賣の老爺作兵衛の子で大寶寺町の搦米屋仁左衛門の養子となつた長吉は親の意見も耳に入れず男達の仲間に入つて放駒長吉と名乗つてゐる。彼は小つま屋甚藏の依頼で長崎の客の爲に力士濡髮長五郎と深い仲の新町越川屋千歳を靡かせようとした爲に濡髮との違引となつたが喧嘩屋五郎右衛門の取成しで和解し兄弟の盟をなし、却つて甚藏等を懲らした。相手の甚藏等三人は太郎助橋で長五郎等三人に仕返しを企てたが、反對に殺された。長五郎長吉は其場で刺違へようとするを、五郎右衛門の氣轉で濡髮は前髪を落して河内の幻竹右衛門の方へ、長吉は堺の方へと落ちて行く、こゝ迄が上卷。中卷は大寶寺町の搦米屋の場で、非人にやつして餘所ながら暇乞に來た長吉は、親の慈悲に動かされて自ら名乗り出でて捕手の繩にかゝる。下卷は河内の勸心寺で幻竹右衛門と五郎右衛門の働で長五郎は思ふ女と伊勢路へ落され、五郎右衛門が長五郎と名乗つて捕縛されるといふに終る。

系統上から見れば、「雙蝶々」は此淨瑠璃の改作と見て差支ない。而してその改作に當つて取合せられて大切な素材となつたのは近松の「壽門松」である。濡がみ長五郎が山崎の人である事は、院本作者に取つては、山崎與次兵衛に關係を持たせる上には至極好都合であり、又「壽門松」が近松の世話物中では特に俠客的色彩に富むといふ點も亦兩者の取合せには便宜があつたと思はれる（壽門松については近松名作集下巻の同曲解題を參看せられ度し）

かくして作られた本曲に於ては、「壽門松」の與次兵衛は父となつてその子の與五郎があづまに溺れる人物となり、濡髮は與次兵衛の恩を受けて居るといふ關係にし、そして「万石通」に於ける長崎の客と濡髮と遊女



年五月十六日  
 康中宅

雙々曲輪日記附番二十二年十月九日  
 雙々曲輪日記

九月九日 浮む瀬の段、第二相撲の段、第三揚屋の段、第四大寶寺の段、第五難波裏の段、第六橋本の段、第七道行菜種の亂咲、第八八幡の段、第九親心寺の段に分れて居る。この中第三段であづまが與兵衛の難を救ふ趣向、第五段の喧嘩の場、第六段の駈落の趣向等はいづれも「壽門松」からの轍案であり、第四の大寶寺の米屋の場は「万石通」の中巻の脱化、第八八幡の親里での髮剃りは「万石通」の上の巻の切から來て居る。而して全體の上から見てこの第八段が山であり、殊に引窓の趣向は舞

行興座角月二十年二十圖寶附番「記日輪曲々雙双」

千歳との關係を西國武士平岡郷右衛門と與五郎とあづまとの關係に作りかへ、濡髪は與五郎のために働き放駒長吉は平岡に頼まれて雙方の達引となる仕組とし、南與兵衛は長五郎とは義理ある兄弟といふ關係を持たせて更に又「万石通」の長吉とお蝶との關係を長吉の姉お蘭と長吉との關係に轉じて趣向をこらしたのである。

全篇九段より成り、第一浮む瀬の段、第二相撲の段、第三揚屋の段、第四大寶寺の段、第五難波裏の段、第六橋本の段、第七道行菜種の亂咲、第八八幡の段、第九親心寺の段に分れて居る。この中第三段であづまが與兵衛の難を救ふ趣向、第五段の喧嘩の場、第六段の駈落の趣向等はいづれも「壽門松」からの轍案であり、第四の大寶寺の米屋の場は「万石通」の中巻の脱化、第八八幡の親里での髮剃りは「万石通」の上の巻の切から來て居る。而して全體の上から見てこの第八段が山であり、殊に引窓の趣向は舞



三弦 岸村兵輔  
宮園上總大夫直傳

ワキ 宮古路藏大夫

与常 名  
あま 名  
緑 名  
ついで 名  
龍 名



ワキ 宮園志十大夫  
宮園和泉大夫直傳

三弦 岸澤化柳

る爲もあらうが、類型の部分の多い作である。併し歌舞伎に移入されてからは好評であり、後には摸でもしばしば繰返されて居る。又歌舞伎の方には書替物もある。因に初めて歌舞伎で演じられたのでは、同じく寛延二年の八月京都の布袋屋座で中山新九郎の濡髪長五郎が大當りであつたといひ、大阪では寶曆十二年十二月角座興行の中山文七の濡髪が好評で翌年四月下旬迄

龍駕仕の縁

臺技巧として巧妙を極めて居る。尤もこの一段は以前は第二段の相撲の場程持離されなかつたが、近年になつて度々上演を見るやうになつた。

此淨瑠璃初演の時は頗る不評で、「夏祭浪花鑑」の團七九郎兵衛と一寸徳兵衛を前髪にして女五郎長吉としたやうであるといはれたとの事であるが、兩作を比較して見れば如何にもさう思はれる點もある。作者が双方共に同じ三人で、材題も亦同じく遊里に於ける俠客の達引であ



ワキ 宮園常大夫  
宮園文字大夫相傳

三弦 春竹林平

双蝶 名  
輪 名  
記 名

尚書公常  
三弦 春竹林平

映風の種葉行蓮

續けた。これは文七の出世藝であつたと言つてもよい。今その時の番附を參考として掲げて置く。江戸で演じられたのはずつと後れて、安永三年九月中村座興行が始めらしい。

他流の語り物としては宮蘭節の詞章が二段残つて居る。「縁の辻駕籠」は原作の第六段の駕舁甚兵衛とあづまとの親子の名乗り合ひの場を取つたのである。「道行菜種の亂咲」は原作の第七段を轉用したのである。又文化以後に於ては江戸の歌舞伎では、豊後節の地で演じられた與五郎あづまの道行も多いが、それは大坂書替物であつて、例へば風鈴蕎麥屋の娘殺しを取入れた「常穗八幡祭」の道行である常磐津の「千種花色世盛」(文化七年八月市村座)の如く夜そば賣や大和團子賣をからませたり、「梅柳春道行」(文政元年正月中村座)の如く梅野由兵衛との廻ひ交ぜになつてゐたり、清元の「壯訥子色成田屋」(弘化二年五月河原崎座)の如く女夫團子賣をあしらつたりしたやうな趣向のものが多いが、今それを一々列擧するの煩に堪へない。

一 いちの 谷 たに 斌 ふたは 軍 ぐん 記 き

寶曆元年十二月十一日から豊竹座興行。作者としては、淺田一鳥・浪岡鯨兒・並木正三・難波三藏・豊竹甚六等五人の名を連ねて居る上に、故人並木宗輔の名をも掲げて居る。本來豊竹座の作者であつた並木宗輔は延享二年並木千柳と名乗つて竹本座の作者に列し、上掲諸篇の外合せて十一篇に筆を執つたが、七年目の寶曆元年再び豊竹座に歸り、並木宗輔の名で、十月興行の「日蓮聖人御法海」の添削をなし、更に本曲の第三段目迄を作つてこの年九月に物故した。よつてそのあとを他の淺田一鳥等が追加して一篇に纏め上げてこゝに上場を見るに至つたのであるといふ。但し三段目迄の全部が宗輔の筆であるかどうかは斷言し得ないが、少く

とも三段目は彼の作と見て差支ないであらう。

平家物語以來愛好せられて居る國民的史譚ともいふべき一の谷に於ける熊谷教盛、忠度六彌太の物語を主材とした作で、本名作集上巻に收めた「須磨都源平躑躅」とほぼ共通の材題を扱つて居て、この作に負ふ所もあるが、その趣向の立て方に於て頗る相違して、一段と技巧をこらしてをる。二つの大きな事件を縋ひ交ぜたために筋は随分複雑になつて居る。全篇五段の場割を表示すれば次のやうになる。

初	大	序……堀川御所(熊谷六彌太出陣)
中	切	……北野天神の場(卿の君の自害)
口	切	……經盛館(教盛出陣)
二	中	……一の谷陣門(小次郎先陣)
段	口	……組打(教盛最期)
目	切	……菟原の里林住家(太五平出陣、六彌太忠度へ櫻の枝渡し)
三	中	……彌陀六内の場(小雪と若衆實は教盛との滯事)
段	口	……御影の松原(青葉の笛渡し、寶引)
目	切	……熊谷陣屋
四	道	行……(菊の前と乳母林との鎌倉への道行)
段	口	……鶴が岡八幡の場(菊の前が危難を救はれた深編笠の侍から忠度の敵は六彌太と教へられる)
目	切	……六彌太館(樂人齋事太五平の述懐)

## 五 段 目

〔大内の場（義經頼朝喋し合せ時忠より寶劍を取返す）  
扇谷平山陣所（六彌太叛逆人平山を討つ）〕

大序堀川御所の場に於て大將義經は辨慶の書いた「一枝を伐らば一指を切るべし」云々の制札を熊谷に渡して一の谷の敦盛の陣に向はせ、六彌太には「さゞ波や志賀の都は荒れにしを……」の短冊を附けた山櫻の枝を渡して忠度に届けよと言ひ含める。これが全篇に亘る大切な伏線となつて居る。熊谷は若木の櫻をいたはれとの義經の心を汲んで一の谷で我が子の小次郎の首を討つて、後に陣屋で義經の實檢に供へる時「敦盛卿は院の御胤、此花江南の所無は、則ち南面の嫩、一枝を切らば一子を切るべし、花に準へし制札の面、察し申して討つたる此首、御賢慮に叶ひしか、但しは直實通りしか御批判いかに」と言ふのである。救はれた敦盛の爲に供養の石塔を建立した彌陀六は、梶原の爲にこの陣屋に引かれて來て居たが、義經はそれが昔自分達が伏見の里で雪の夜に救はれた宗清であると觀破して舊恩を感謝する、そして彼が大切に育てる娘の小雪（重盛の女）への贈物として鎧櫃を與へる、中には敦盛が忍んで居る。有爲轉變の世の無常を悟つた熊谷は出家する、三段目の切て全篇の山である。

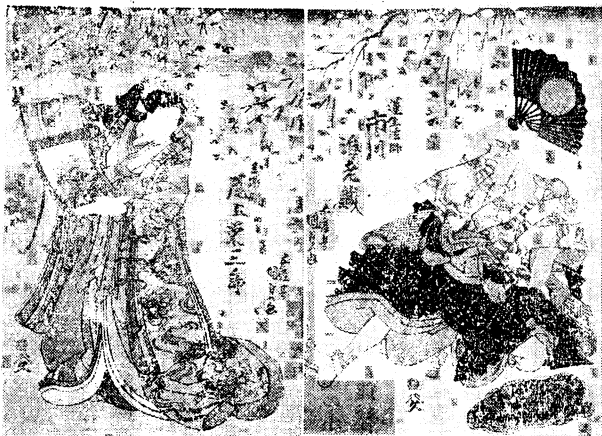
菟原の里の隱家で櫻の枝を受取つて我が歌の勅撰集に入れられたのを知つた忠度は、義に感じて須磨の浦で六彌太に首を授ける。六彌太が大力無雙の忠度の首級をあげ得たのは、旗持が忠度の右腕を斬落した爲であつた。その功で旗持太五平は樂人齋と名のつて六彌太から舅として敬はれる身分となつた。併し樂人齋は實は重衡の臣後藤藤兵衛守長と菊の前の乳母林との仲の子である。父の汚名を雪がうとして、夕暮の亂軍中誤つて六彌太と思つて忠度を斬つたのである。菊の前が林と共に六彌太を討たうと館へ入込んだ時わざと菊の

前に斬られて一切を告白する、しかもこゝへ來會せて居た六彌太の馴染の京九條の遊女菅原はその妹であるといふ持つて廻つた仕組みで、こゝに太五平親子兄妹の邂逅と死別とを見せて居る。



一のそ「運物生」

この四段目の切に後に西澤一風が加筆して、「流しの枝」といふ琴唄を入れ、佐々木市藏が作曲し、弘化三年正月大阪の角座で市川海老藏の獨吟で大當りであった。嘉永二年に八代目團十郎が下阪した時これを習つ



三のそ

二のそ

て歸り、八月から河原崎座で「一谷武者畫 土産」と題して土産狂言として演じた。(傳奇作書拾遺下)

又後に新歌舞伎十八番の一として演ぜられた「蓮生物語」は本曲の第三段目切から脱化した蓮生の後日譚である。天保十二年四月中村座で「堺開帳二升花衣」と題して、蓮生坊海老蔵、玉織姫榮三郎、盛久彦三郎で演じたのが始めて、嘉永五年三月河原崎座再演の時「新十八番の内蓮生物語」と銘を打つて出した。

この嫩軍記は大當り大入りで、翌寶曆二年の春から夏を打通し、盆から大切に操り踊を附けて興行した程であつた。操りて好評であつた爲に歌舞伎へも直に移入され、寶曆二年五月には江戸の中村座森田座が相共に上場し、同年十一月には大阪の中の芝居でも演ぜられ、以後操りでも歌舞伎でも何回となく繰返されて今日に及んで居る。

奥州安達原



寶曆二年五月中村座上演番圖

寶曆十二年九月十日から竹本座興行。作者は竹田和泉・近松半二・北窓後一・竹本三郎兵衛。

前九年の奥州攻を世界とした浮るりは少くないが、本曲は前九年の合戦後の安倍貞任・宗任兄弟を中心としての一大家族等の再舉の爲の苦心を主材とし、之を脚色するに、奥州に縁故のある古來の傳説として既に謡曲にも作られて居る善知鳥の傳説と安達原の鬼女の傳説とを利用して傳奇的の色彩に富む趣向を凝らしてある。その場割りと同概とをいへば、第一段大序「鶴が岡假屋の場」で義家は金札をつけた鶴を放つ、二段目への伏線である。次の「吉田の神前の場」で皇弟環の宮が匣の内侍と共に行方不明となる。切「義家館の場」義家は環の宮失踪の當の責任者たる志賀崎生駒之介を勘當する。その情人傾城戀絹が貞任の妹たるを知り共々に一つの功を立てよと言ひ合める。第二段目は「外が濱の場」と「善知鳥文治住家の場」とに分れ、貞任の一千代童の藥代の爲に禁制の鶴の金札を取つた善知鳥文治は訴へられる事となつた。併しその訴人たる外が濱の南兵衛とは主従の間柄、即ち南兵衛は宗任である事が分ると、南兵衛は文治に代つて科人となつて都に引か



りよ「奥州奥経路」



れる、義家に一矢を報いんとの心からである。第三段口は「朱雀の堤の場」で、義家の勇で環の宮の傳たる儀仗直方が不義の靡で勘當した長女の袖萩が非人となつて居るのに會ふ條、切は名高い「儀仗館」で、袖萩の祭文から儀仗の切腹、僞勅使桂中納言と名乗つた貞任と妻の袖萩及び鶴殺しの南兵衛との絶えて久しき夫婦兄弟の對面。第四段口「奥州白河の關の場」で、環の宮の行方を尋ねさまよふ生駒之介と戀絹とは悪人の難を遁れて安達原の一つ家に辿りつく。切「一つ家の段」、貞任宗任兄弟の母岩手御前は一つ家に住んで環の宮をかまくまひつゝ強盜を働いて軍用金を作つて居る。宮の止聲病を平癒させる爲にと折柄泊り合せた戀絹の腹を割いて胎兒の生血を取つたが、女の血が亡夫の髑髏ににじんだので我が娘と知るのみでなく、環の宮とは實は義家の子八つ若、匣の内侍は實は新羅三郎で、いづれも義家が裏の裏へと手を廻して、神の如き明察を以て計つて置いた事が漸く明かになる。故に第五段に於て貞任は豫て奪つて隠匿して置いた十握の寶劍を義家に渡し宗任の後事を托して自害しこゝに萬事は解決するといふ筋である。

貞任の子千代童を守り育てて再擧を計る趣向は、是より先、元文二年正月豊竹座興行の並木宗輔の作「安倍宗任松浦登」に仕組まれて居るのを取つて善知鳥の傳説を取合せて趣向を立てたのは巧妙であり、安達原の一つ家も如何にも器用に醜案されて、一切の祕密はこの家の正體を發いて初めて解るやうに仕組んである。誠に技巧の極といへばいふべきであらうが、何といつても割合に劇的に勝れて居るのは三段目の切である。

例の南兵衛の宗任の「我が國の梅の花とは見たれども大宮人は何といふらん」の歌話は既に平家物語の劍の巻などにも見えて居る程で相當に古いものであらうが、これを劇に仕組んだのも本曲よりは前であつた。ここに掲げる寶曆二年秋江戸の中村座で興行された「諸粹奥州黒」の繪づくしの一部などもその一例となるで





て、次に出的のが延享二年正月曾根崎の明石越後掾座上  
 演の「三軍枯槁原」で、作者は櫻井頼母・戸田采女等であ  
 る。又紀海音の「甲陽軍鑑今様姿」(享保二年の作)の系統  
 を引いたものに寶曆六年閏十一月一日から豊竹座で興行  
 された「甲斐源氏櫻軍配」がある。淺田一鳥等の作で、諷  
 訪法性の宛々探案のために國を出て、好色に身を持扇す  
 と見せて、實は謀將勇士を語らふ武田晴信の働きに村上  
 義清の奸策を取合せ、武田上杉の合戦は村上の離間策に  
 よる任組として、その間に山本勘助を働かせて居る。斯  
 様に色々の作があるが、その中で勝れて居るのは「信州  
 川中島合戦」である。「本朝廿四孝」は藍本としてこの作  
 を採り、傍らその他の前記諸作の作意をも參酌した上に  
 更に半二式の技巧を凝らして作り上げたもので、筋が複  
 雜を極めて居る上に、覆面の人物や疑問の曲者を澤山に  
 働かせてある點に於て、恐らくは技巧澤山の院本中の典  
 型といつてよからうと思ふ。

本曲の仕組は非常に入込んで居るが、筋をほぐして要

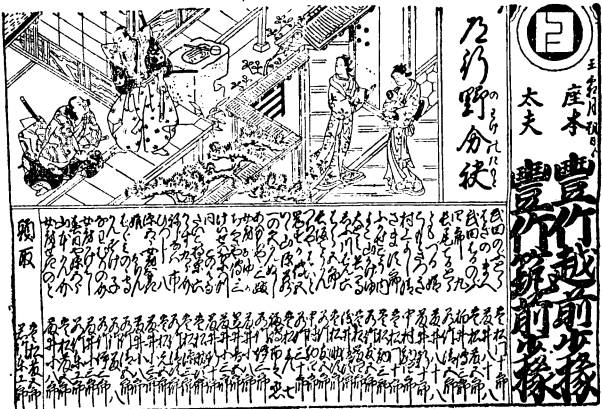


正徳月劇  
座本  
太夫  
豊竹座  
甲斐源氏櫻軍配

三味線	合目	高口	三限口	高口	初段
頭取	三味線	高口	三限口	高口	初段
右花井八郎	右花井八郎	右花井八郎	右花井八郎	右花井八郎	右花井八郎

兵 源 斐 甲

點をいへば次のやうである。種が島の一發で將軍義晴を射殺して透電した井上新左衛門、諏訪明神鳥居前の力石の下より顯れる曲者、上杉家の花作り關兵衛と、斯う姿を變へて足利家を滅し天下を覆さうと企てて居る美濃の齋藤道三が本曲に於ける事件紛糾の黒幕で、これに腹黒き北條氏時と村上左衛門とを取合せて、彼等の奸計によつて、諏訪法性の兜の事で不和の武田上杉の確執はいよゝゝ高まると共に、將軍暗殺者を捕へ得なければ三年後には切腹とその兩親によつて誓はれた勝頼と景勝は拔差ならぬ羽目になつて行く。兩人共に身代りの必要に迫られた。景勝と慈悲藏の直江山城とは、慈悲藏の兄横藏を召抱へて身代りにしようとしたが、横藏はそれには餘りに深慮大望の士であつた。義晴が暗殺された時にその胤を懷妊して居る賤の方を奪ひ去つた覆面の人物は彼であつた。諏訪明神の力石で勇力を示して曲者から蓑を得たのも彼であつた。彼は夙に武田信玄と肝膽相照らし、その内命によつて足利家の若君を我が子として育てて居た山



〔配 軍 團〕



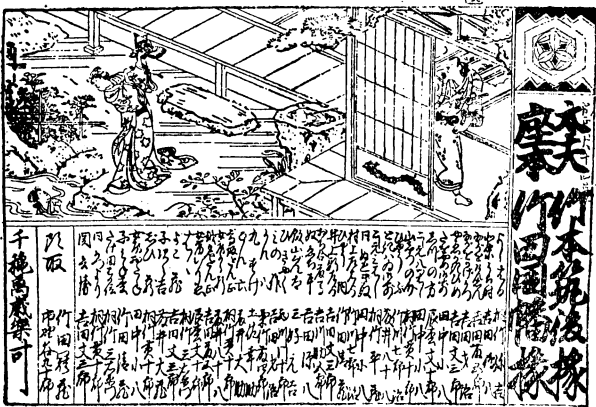
はれたのを怨んで居る齋藤道三たる事は「みの一つだに  
なきぞ悲しき」によつて覺つたとは、恐らく院本作者の  
味噌の上乗なるものであらう。題名は本曲の山たる勘介  
住家の筍掘りに基くことは言ふ迄もあるまい。  
全篇の場割りを表示すれば次のやうになる。

口……室町館の場（賤の方懐胎の祝、武田上杉  
確執が問題となる。義晴の上意で勝頼と  
八重垣姫との婚約をさせる——四段目  
への伏線）

初 段中……誓願寺茶店の場（直江山城と賤の方の腰  
元八つ橋の不義問題）

切……室町奥御殿（義晴の暗殺、賤の方の奪取、  
曲者の投げた小柄が三段目 伏線。直江  
八つ橋の追放、これも三段目へ聯絡、上  
杉武田の誓言）

二段目 口……下諏訪明神の場（兵部義作召抱、濡衣百  
度参り、横藏曲者出會）  
切……信玄宿の場（勝頼の切腹）



「附 番 孝

三段目 口……桔梗方原の場(境目争ひ、捨兒)

切……勘介住家(景勝下駄の場、笏捌り、横藏の物語)  
道行 (装作と濡衣との信濃への薬賣となつての道行)

四段目 口……和田山村上館(百物語、村上狐にばかさる)

切……謙信館(十種香、狐火、道三最期)  
五段目……大團圓

三段目の口の桔梗原に於ける境界争は近松の「津國女夫池」の第二段の境界争からの脱化らしく、勘介住家は「川中島合戦」の輝虎配膳の場の雛案たることは明かである。

此の淨瑠璃興行の際、第四段目に於て見物席をはずに引割御殿をせり上げ、古今の大道具で、大入であつた。その後操りでも度々繰り返されたのみでなく、同じく明和三年五月大阪の中座で初めて上演されて以來歌舞伎でも長く屢々演ぜられるに至つた。

關取千兩せんのり

明和四年八月四日から「花軍壽永春」の後芝居として竹本座興行。

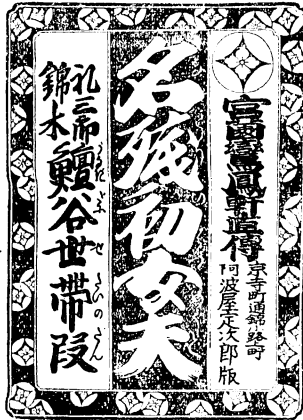
作者は近松半二・三好松洛・竹田文吉・竹田小出・八民平七・竹本三郎兵衛。

此の當時大阪で人氣力士として最負の血を湧かせた稻川千田川をモデルとして「雙蝶々曲輪日記」の力士



達引の趣向を齷案して想を構へた作である。

江州彦根藩の御用を勤める大阪の鶴屋浄久の悴禮三郎は大阪屋抱へ錦木に溺れて、その身請金才覺の事から戀敵たる彦根の浪人村岡右衛門及びその一味の徒から贖金をつかまされて親の勘當を受ける。丁度この時彦根藩物頭役三島彌太夫の女おさいが許嫁の男ある身で禮三郎と密通して居た事が顯れて、これも勘當されて禮三郎をたよつて来る。禮三郎は進退に窮する。浄久に恩のある池田の關取岩川が禮三と錦木を預り、おさいは力士千羽川の女房が預る。これが事件の發端で、關右衛門の手先には力士鐵ガ獄が居る。自然岩川との達引となり岩川は先方の錦木身請の猶豫を乞ふ爲に千番に一番といふ大切な土俵、勝負を鐵ガ獄に譲らうとするを、岩川の女房おとわが身を賣つて危機一髪の際に之を救つた。併し錦木はおとわの義に感じて再び身を賣る、一方禮三は鐵ガ獄殺しの嫌疑を受けて前途を悲み、錦木と情死を企てたが人々の盡力によつて日出度く納るといふのが大筋で、こ



夫 女 初 笑 名



關 取 千 兩 藏



(明和八年作)はこの改作であり「關取二代鑑」は改題である。

本曲が轉用された他流の語り物としては詞章の残つて居るものに宮蘭節の「角力の段」及び七段目鱧谷を取つた「名残初女夫」がある。又「猪名川内の段」は新内では今も行はれて居るのは周知の事であり、又常磐津にもある。常磐津の岩川内の段は天保六年六月市村座で興行されてゐる。

序に正本について一言して置き度い。

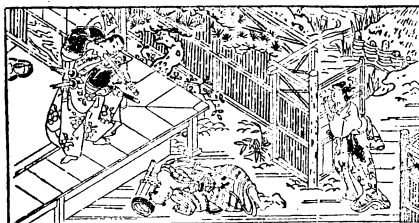
現存の正本に「花軍壽永春」と合綴のものゝ單行のものゝの二種ある。合綴の方が原作で、之は三十一丁の裏から起してあるのに、單行のものは三十二丁表から起してあるので、原作の三十一丁裏と三十二丁、即ち三頁に亘る文を三十二丁の二頁に縮約してある。あとは同文。單行本の丁附の初めに「關初ノ三十二」とあるはこれが爲である。

本 板 再 「橋

あふみげんじ  
近江源氏 先陣館

明和六年十二月九日から再興の竹本座興行。作者としては近松半二を筆頭に八民平七・松田才二・三好松洛・竹田新松・近松東南・竹本三郎兵衛等の名を連ねて居るが、再版の正本には半二・半七・三郎兵衛の名を掲げて居るのみである。この中半二が立作者たるは言ふ迄もない。

史劇の絶好材題の一つともいふべき豊臣氏の末路が劇に仕組まれるに至つたのは、江戸の後期からの事であつた。それとても難波戦記などのやうな、これに關する戦記などに基く脚色でも露骨な人名を以てしては其筋から容易に許されない。そこで忠臣蔵や鳥原合戦や、又は由井正雪などと同じく世界を昔に取つた。寶永七年正月(?) 豊竹座上場と傳へられる紀海音の作「頼光新跡目論」は井上播磨の正本であつた頼光の跡目論に假托して、關ヶ原の役を仕組み、頼光を秀吉、頼信



前清福

座本  
大夫  
義経腰越状

大序 切口 豊竹座上場	二層 切口 豊竹座上場	二層 切口 豊竹座上場	二層 切口 豊竹座上場	二層 切口 豊竹座上場	二層 切口 豊竹座上場
-------------------	-------------------	-------------------	-------------------	-------------------	-------------------

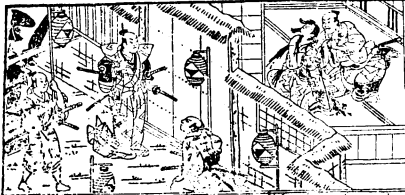
經 義



に動かされて軍師として大阪城に入る事とし、舟田が空砲によつて後藤の本性を試みる事、後藤の妻關女が尊氏を砲撃する事などを山として仕組んである。その描寫が頗る赤裸々にして大膽であつた爲に、その筋の忌憚に觸れて出版を禁止された。然るに十年後の延享元年三月江戸の肥前座に於てこの作を「義經新合狀」と改題して興行し、併せて正本をも出版した。南北朝の世界を頼朝時代に改め、文章に多少の修正を施したが、大體に於て原作と同物である。外題替に「後藤伊達目貫」「泉三郎伊達目貫」などがある。而して更に十一年後の寶曆四年七月豊竹座でこの改作たる「義經腰越狀」(並木宗輔の補筆)が興行された處が、四段目は上演を禁止され、正本も亦幸じて三段目迄を出版し得た。これは四段目の口鶴が岡の場で家康にあてた頼朝を關女が狙撃する條が問題となつたのである。但し本曲は操りでこの後屢々繰返されたのみでなく、歌舞伎にも入つて、五斗兵衛は永く劇壇を賑して居る。

斯の如く、大阪陣を材題として、豊臣氏に同情を寄せて

昭和七年一月



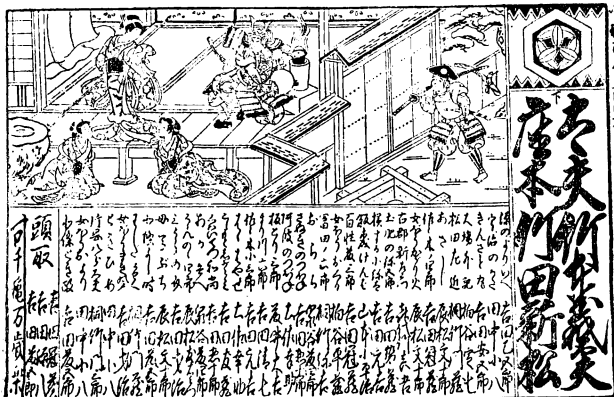
大平頭登飾

座本竹田新松

序	第一	第二	第三	第四	第五	第六	第七	第八	第九	十
竹本文左衛門	竹本文左衛門	竹本文左衛門	竹本文左衛門	竹本文左衛門	竹本文左衛門	竹本文左衛門	竹本文左衛門	竹本文左衛門	竹本文左衛門	竹本文左衛門

編 頭 平 太

作られた戯曲は、相當にその筋の壓迫を蒙つたに拘らず手  
 を代へ品を代へて舞臺に現れた。そのあとを受けて作られ、  
 そして又名作として後迄も持囃されたのは實にこゝに收め  
 た「近江源氏先陣館」である。本曲は上記の諸篇を藍本と  
 して技巧をこらしたものである。世界を饑饉時代に取  
 近江の坂本城を大阪城に擬し、近江源氏の嫡流たる佐々木  
 三郎盛綱と弟四郎高綱とが敵味方と相分れ、義によつて骨  
 肉相戦ふ處に山を設けて、これに片岡造酒之頭が源氏と北  
 條とを結ぶ爲に時政の女時姫と頼家とを縁組させようとす  
 る苦心、時姫は三浦之助吉村を戀して居る事、坂本城に於て  
 は大江入道藤澤藏人等が宇治の方と頼家母子を亡き者にし  
 ようと奸計をめぐらして造酒之頭を斥ける事、造酒之頭の  
 志を繼ぐ三浦之助は四斗兵衛と呼ばれる大酒漢、實は和田  
 兵衛秀盛といふ智勇兼備の豪傑を坂本城の軍師に招聘し、  
 彼はその意氣に感じて働く事などを取合せて九段に仕立て  
 である。その場割は次の通りである。第一鎌倉御殿の段、  
 第二東大寺の段、第三頼家館の段、第四道行旅路のぬれ衣、



附 番 市 頭

第五高宮茶屋の段、第六四斗兵衛住家の段、第七坂本城の段、第八盛綱陣屋の段、第九佐々木船長より和睦迄。この中で名高いのは第六と第八との兩段であつて、第六段は「南蠻鐵後藤目貫」以來の豪快な場面を以て勝れ、第八段は身代り首實檢の最も技巧を凝されたものとして、作者の技倆を窺ふに足る場面である。

本曲が始めて歌舞伎で演じられたのは、明和七年五月十三日からの大阪中座の興行で、盛綱三掛大五郎、三浦之助小川吉太郎、四斗兵衛藤川八藏、高綱・時政中山文七等の顔ぶれであつた。

本曲初演の翌年なる明和七年五月廿二日から同じく竹田新松座に於て「太平頭整飾」を上場した處が興行禁止を命ぜられて六月十六日限りで中止した。爲に正本も出版されなかつたが、番附によつて見れば「近江源氏先陣館」の改作らしく思はれる。なほ又これより後に作られた「鎌倉三代記」(天明元年三月)や「日本賢女鑑」(寛政六年十月)や「鷄湖高名硯」等も亦同じく豊臣氏の末路を材題としたもので、共に「近江源氏先陣館」の影響を少なからず受けて居る。

神しん 靈れい 矢や 口くちのわたり 渡わた

明和七年正月十六日から江戸外記座興行。作者は福内鬼外。補助、吉田冠子・玉泉堂、吉田二一。

新田義興が竹澤良衛江戸高重等に謀られて武藏の矢口渡に於て横死をとげ、その怨念が雷電となつて江戸高重を悶死せしめ、のち同所に新田明神として祀られたといふ事は、太平記第三十三卷の「新田左兵衛佐義興自害の事」の條に詳しい。これ即ち矢口明神縁起の原據であるが、材題をこゝに求めて脚色したのが「神靈矢口渡」である。作者が本曲を作るに至つたのは、矢口明神の神主の依頼によつたとか、組上太郎の徳憑



に基くとか、吉田冠子の發意であるとかいふやうに、色々の宣傳めいた言傳へもあり、又舞臺に上せても江戸の民衆から喝采された程で頗る有名な淨瑠璃である。併し一代の才人平賀源内の作品として見れば、彼特有の辛辣なる諷刺も皮肉もなく、平凡な類型的の構想と趣向とに墮した淨瑠璃たるに止つて居る。併し淨瑠璃作者福内鬼外の作としては代表作である。自然江戸作者の淨瑠璃中の名作であるのみならず、義太夫淨瑠璃といへば大阪中心であつたのに對して、場所も出来事もその重要な部分は江戸附近である上に、江戸の作者の手によつて、所謂江戸前の呼吸で綴られたものとして注目すべき作品であると謂つてよい。

本曲は新田義興の横死後のその遺族遺臣の活動の主眼として居るが、これを義興の遺孤德壽丸を守立てる遺臣の苦衷と、義興の弟義峯をめぐる悲劇との二つの大筋の組合せとし、それが爲に二ヶ所に大きな山を設けてある。その仕組の要點をいへばかうである。新田義興は心中深く覺悟する處があつて、小手指原で足利尊氏と戦ひ老臣由良兵庫之助の諫を用ひずして竹澤監物の首に従つて輕々しく尊氏追撃を企てて矢口渡に於て監物の奸計にかゝつて自刃する。遺臣南瀬六郎は新田城なる幼君德壽丸を伴うて六十六部に身をやつして敵の追跡を遁れたに、兵庫之助はおめくと足利に降参した。但しこれは表面で、實は南瀬と兵庫之助とは腹を合せて、德壽丸と兵庫の子とを取換へ置き、兵庫は足利の祿を食みつゝ德壽丸を我が子として養育して居る。年經てこゝへ六郎が竹澤の部下に追跡されて避難し、兵庫は竹澤への申譯として、彼が德壽丸と目をつけた我が子を身代りに立て、折柄來會せた先君の御臺や我が妻に本心を明かすといふ三段目の兵庫館の場が一つの山となつてゐる。そのあとを受けて四段目の頓兵衛内の場に於ては、義峯に戀した頓兵衛の娘お舟が、身を捨てて義峯を助ける條に更に大きな山を設けてある。かくて結局義峯は義興の怨靈と水破兵破の二

神矢の加護とによつて竹澤一味の敵を滅し、新田足利は茲に和睦し義興は矢口明神と祀られるに終る。  
 作中最も特色ある人物は首ふ迄もなく矢口の渡守頼兵衛で、金の爲には義理も人情も顧みない悪に徹した  
 圖太い人物として描かれて居るが、この類型の人物としては近松の「柵狩劍本地」の三段目艾屋の場に出て  
 来る悪に徹した久作を擧げる事が出来ると思ふ。  
 作者福内鬼外・平賀源内の淨瑠璃作者としての戯戯。讃岐志度の浦の人。名は國倫、字は士藝、鳩溪と號

し、又戯名を風來山人・天竺浪人・森羅  
 萬象などともいつた。彼の傳記、彼の  
 多方面に亘つての活動については世に  
 知られて居る事故、こゝには特に彼の  
 筆になる淨瑠璃の外題名と、その興行  
 座及び初日を左に列擧するに止めて置  
 く。

神靈矢口渡

明和七年正月十六日 外記座

源氏大草紙

明和七年八月十九日 肥前座

弓勢智勇漢

初段	初段	初段	初段	初段	初段	初段	初段
初段	初段	初段	初段	初段	初段	初段	初段
初段	初段	初段	初段	初段	初段	初段	初段
初段	初段	初段	初段	初段	初段	初段	初段
初段	初段	初段	初段	初段	初段	初段	初段
初段	初段	初段	初段	初段	初段	初段	初段
初段	初段	初段	初段	初段	初段	初段	初段
初段	初段	初段	初段	初段	初段	初段	初段
初段	初段	初段	初段	初段	初段	初段	初段
初段	初段	初段	初段	初段	初段	初段	初段

返見紙表「源氏大草紙」

明和八年正月廿日 肥前座  
嬖<sup>わかのみきり</sup> 秦葉相生源氏

安永二年四月卅日 肥前座

前太平記吉跡鑑 肥前座

安永三年正月十二日 結城座

忠臣伊呂波實記 肥前座

安永四年七月十五日 肥前座

<sup>天日荒御</sup> 靈新田神徳 結城座

安永八年二月八日 結城座

靈驗宮戸川 肥前座

安永九年三月三日 肥前座

<sup>みはえげんし</sup> 實生源氏金王櫻 肥前座

寛政十一年正月 肥前座

以上の九篇がある。中には吉田仲二(二一)と同人か)や二世森羅萬象(源平藤橘)が手傳つたものもあるが、大部分は鬼外の筆である。而して鬼外が歿したのは安永八年十二月十八日であるとも、又は安永九年二月十八日であるとも傳へられて居るが、兎に角「靈驗宮戸川」は彼の歿後に興行されたものといふべきである。殊に「實生源氏金王櫻」に至つては、ずつと後になつて興行されると共に正本も刊行されたもので、「故人

實生源氏金王櫻 故人福良裏外遺作  
兩雄並く事ひと人の國門晴平旅  
元来海内中有新進河の流夏夜兼系  
平清盛門と掲のさきむらさきの波の  
唯春沖にわたりてラロと係て七回けり  
本多重隆の軍津層舟の鐘觸空しく輝  
染地く天篇秋の月の登望津央文

福内鬼外遺作」として、三段目迄を出し、その正本表紙見返しの太夫役割附の四段目以下の空白欄に「福内鬼外故人に成申候故此跡出来不申候御斷申上候 座本」と記入してある。

### 妹脊山婦女庭訓

明和八年正月廿八日から竹本座興行。作者としては近松半二・松田ばく・榮善平・近松東南の名を連ね、後見として三好松洛が控へて居るが、これも半二が中心たる事は言ふ迄もない。

初代義太夫が旗上げをしてから八十餘年連綿として續いた竹本座が明和四年に一度退轉し、明和六年十二月竹田新松が座本として再興し「近江源氏先陣館」を出したが、それ以來も兎角振はずして、窮餘の策として、明和七年秋三代目吉田文三郎冠子を江戸から呼下し、江戸で好評のあつた「矢口渡」を出したが、これもさしたる反響もなく、竹本座も又々廢座の運命に迫つた時に、半二が一生の智慧を絞つてこの妹脊山を作り、特に山の段の定香を當時賣出しの春太夫に、大判事を名人の聞えある染太夫に語らせて大好評を博し、四五年來の不入を一時に取返して、座の旗色が立直つた淨瑠璃であつたといはれる。それゆゑ故篁村翁は曰く、「此の作は半二代の手柄のみにあらず、竹本座再興の獨參湯ともいふべきなり」と。

思ふに本曲は結構の雄大にして、種々の傳説趣向の巧みに利用せられ、巧妙複雑なる技巧の極致を示して居る點に於て、正に淨瑠璃王代物中の雄篇名作の一つと謂つて差支ないであらう。

鎌足が入鹿を滅した事件及び珠取海士の傳説を材とした戯曲としては、古くは謡曲の「海士」、幸若の「たしよくわん」があり、古淨瑠璃にも、山本角太夫の「大しよくわん」(延寶八年)井上播磨の「大職冠知略

玉取」、岡本文彌の「大職冠方便玉」、松本治太夫の「大伽藍寶物鏡」等があり、更に近松の「大織冠」(正徳二年春)から竹田出雲の「入鹿大臣皇都<sup>みやま</sup>詠<sup>うた</sup>」(寛保三年四月)と次第に後になる程技巧的となつた作が現れ、又歌舞伎に於ても夙に元禄六年京都の早雲座では「面不背玉」(白石彦兵衛作)が興行され、元禄十四年正月は江戸の中村座で「傾城王昭君」(市川團十郎作)が上演されて居る。半二は如上の大織冠物の中から、特に入鹿討伐の方面の材料を求めた上に、更に大和に於て古來有名な傳説で既に淨瑠璃や歌舞伎にも仕組まれた事のある采女の絹掛柳の傳説、神鹿殺しの科としての石子詰の十三鐘の説話及び謡曲「三輪」の苧環の傳説等を巧に取入れて一篇の趣向をこらして居る。而して是等の多くの説話傳説を活用するために、作者は先づ、筋立の必要上から惡の權化ともいふべき超人間的の力を有する入鹿の生立について次のやうな宿命の因縁を興へて居る。彼の父蘇我の蝦夷が齡傾く頃迄も一子なきを憂へて時の博士に占はせ、白き牡鹿の生血を取り、之を母に興へたその験として健かなる男子が出生した、鹿の生血が胎内に入つたによつて入鹿と名づけたのであるといふ。それ故彼が心をとらかして、その所持する寶劍を奪還してその上で彼を誅伐するには、爪黒の鹿の血沙と疑著の相ある女の生血とを混じて鹿笛に注ぎかけて吹く時は秋鹿が妻戀ふ如く自然と鹿の性質が顯れて、その色音を感じて正體が無くなるのである。それ故入鹿討伐に粉骨する淡海とその腹心の者とは、この最後の目的を達する爲に働いた。即ち獵師芝六は我が子の三作が石子詰になるのも厭はずに禁を犯して爪黒の鹿の血沙を得た。漁師鱈七の金輪五郎は戀に狂ふ可憐なるお三輪を疑著の相ある女として殺した。而して淡海を中心として戀を争ふ橘姫とお三輪との三人を入鹿の館にたぐり寄せて二女の犠牲によつて宿志を遂げさせるべきの機縁を作る爲に苧環の糸は繰られるといふ趣向になつて居るのである。の

みならず天智天皇と采女とを入鹿の毒手から救ふ爲に絹掛柳の傳説の齣案が用ひられて居る。そしてこれが一つの動機となつて相愛の久我之助と雛鳥とは、その親と親との和解し難き争を象徴するかの如き越え難き吉野川を隔てて侍の體面と女の操との爲に自害して彼等の悲しき戀を消すまで永久に吉野の川瀬に流し去るのである。

かういふ複雑な趣向が、尙その上に補助的の筋立や挿話が伴ひつゝ、第一段第二段のそれらの場面と間に適宜に伏せられて、それが三段目四段目の葛藤の山を越えて次第にほぐれて最後に至つて漸く全部が明かされるといふ仕組であるから、筋を辿る上に於ては随分厄介千萬である。その場割りを表示すれば次のやうである。

初 段

大序……大内の場

中……春日野小松原の場(久我之助と雛鳥との濡れの場、三段目切への伏線)

詰……蝦夷自害の場

切……入鹿入定の場(入鹿の本心明し)

口……猿澤池の場(絹掛柳)

中……つづら山鹿殺しの場

切……芝六住家の段(かけ乞、萬歳、十三鐘)

口……定香館

中……花渡し

三段目

切……山の段

口……井戸がへの場

次……杉酒屋の場

四段目 道行

奥……御殿の段(橋姫歸館、蟻七上使、竹に雀、奥御殿)

跡……入鹿退治

五段目……大團圓

本曲に於ては三段目切山の段が最も舞臺技巧を弄した有名な場面であるが、これは近松の「信州川中島合戦」(享保六年)の第四段目山の段から脱化したものであらうかと考へられる。

歌舞伎で始めて演じられたのは豫ての初演と同じ年に大阪の小川座で興行したのであり、江戸では安永七年春森田座で初めて興行された。道行は竹本であつたが、文政十一年八月中村座興行の時、その道行を富本にして「柳糸戀苧環」と題して、富本豊前太夫等が語つた。富本で行はれる「お三輪」はこれで、詞章には筆を加へられて居る。その後天保四年七月河原崎座で演じられた時にはその道行を常磐津で語つた。外題は「願ねがひ絲いと縁いづ苧んじ環たまきといひ、詞章は寶田壽助が補綴した。これが常磐津の「お三輪」である。

攝州合邦辻

安永二年二月五日から北堀江座興行。作者菅專助・若竹笛射。

大阪の天王寺の西門の傍に閻魔堂建立のために勸化を事とする合邦は、元は鎌倉の大名青砥藤綱の子であつたが、佞人に讒せられて世を捨てたものである。その娘お辻は河内の大名高安左衛門の館に仕へ、その寵を得て正妻に引上げられて玉手御前と呼ばれた。先妻の子に世繼俊徳丸があり、外戚腹に次郎丸といふがある。次郎丸は悪人壺井平馬等と謀つて世繼の繪旨を窃取し、又俊徳丸を殺して家を奪はうと企てた。俊徳丸には和泉の藤山長者の女淺香姫といふ許嫁があつて、二人は相思の仲であつた。然るに玉手御前は義理ある子の俊徳丸に深く戀慕して、その戀の叶はぬ怨みに俊徳丸に毒酒をすゝめて癩病にかゝらせた。俊徳丸は家出して天王寺の非人小屋に身を寄せたが、淺香姫が尋ねて來て連歸らうとする。こゝへ次郎丸一味の者が襲ひ寄せて既に危かつた處を合邦に助けられてその家にかくまはれた。執念深く俊徳丸の跡を追ふ玉手御前にこゝで逢ふ。合邦は娘の不倫を憤つて之を刺すと、玉手御前は始めて本心を告白した。俊徳丸への道ならぬ戀慕は悪人の難を避けさせる計略であつた。寅の年月日揃つた自分の生血を絞つて飲ませると俊徳丸は平癒した。かくて玉手御前は繼母としての義理を立て、寵愛された高安左衛門への報恩を全うした。

かういふ筋を上下二卷に分けて、上卷あられの松原毒酒の場、中高安館、切繪旨取戻しの場、下卷口天王寺西門の場、切合邦内の段に分けて脚色してある。

本曲は弱法師の傳説を主材とした事は言ふ迄もない。故吉田東伍博士の説では、太平記卷五の「相模入道田樂を弄ぶ事」の條の「天王寺のやよろべしを見ばや」といふ田樂の新座本座の者共の嘯し言葉の中なる「よろべし」は妖靈星といふ悪星ではなく、弱法師の詛語であらうといふ。然りとすれば既に北條高時頃に大に行はれた田樂に弱法師といふ曲名があつたものであらう。その内容が明かでないから斷言は出来ない



が、或はこの弱法師が謠曲の「弱法師」の原據であるかも知れない。謠曲の「弱法師」は河内の高安の里の左衛門尉通俊が讒言を信じて一子俊徳丸を追放した。俊徳丸は盲目の非人となつて弱法師と呼ばれる悲惨な境涯に沈んだが、天王寺に於ける父の施行の満願の日に邂逅して救はれるといふ筋である。而してこの説話は更に一方に於て説經の「しんとく丸」となつて世に弘まつて名高くなり、古淨瑠璃に於てもこれを轉用して語つた。寛文元年九月刊行の山本九兵衛板の「しんとく丸」がそれである。この説經系の古淨瑠璃「しんとく丸」に謠曲の構想と詞章とをも取入れて作つたのが初代義太夫の正本「弱法師」である。本曲は元祿七年九月の作と考定されるが、高安左衛門の嫡子俊徳丸が父の死後繼母の呪詛によりて悪疾を得て盲目となり、流浪して弱法師と呼ばれたが、その情人たる陰山中納言信之の女露の前の情と善光寺如來の功力とによりて病氣本復し忠臣柳井中光等と共に天王寺に於ける善光寺如來の出開帳の際、異母弟二郎丸を始め惡人共を捕へるといふ筋で、第三段目は謠曲「弱法師」によつて居る。

「合邦辻」はこの義太夫の「弱法師」を根幹とし居る事は明かであるが、併しこゝに注目すべき事は、この「弱法師」及びその原作となつた古淨瑠璃や説經に於ては、俊徳丸は繼母に惡まれて苦楚を嘗めるのであつて、繼母が俊徳丸に戀慕したが叶はぬ爲であるといふ想はどれにもない。併し合邦辻に於てはこれが極めて大切な想である事は言ふ迄もない。然らばこれは何によつたかといふに、「しんとく丸」と同じく説經として名高い「愛護若」の系統を引くものである。蓋し年若き繼母が左程年齢の差の無い美しい繼子に戀して、それが悲劇の動機となるといふ説話の原據をなすものは、今昔物語卷四の「狗拳羅太子眼を執り法力に依りて眼を得る語」であらう。この物語は天竺の阿育王の太子狗拳羅が繼母の戀を斥けたために讒せられて父王から追放

された上に、更に奸計にかゝつて兩眼を抉り去るべく餘儀なくされ、盲目となつて流浪した末それと知らずに父王の厩に迷ひ來て琴を弾いたので、こゝに父王に邂逅し得て身の明りが立ち、且つ大阿羅漢の法力で再び眼を得たといふ話である。この説話が分れて一方には弱法師系のもとなり、他方に於ては愛護若系の説話となつたとも考へられるが、愛護若物としては説經が古く、これによつて古淨瑠璃の「あいごの若」が作られ、更に初代義太夫の正本「都の富士」(元祿六年)となり、更にこの作から海音の「愛護若母箱」(正徳四年)や辰松幸助の「愛護若都の富士」や近松半二等の「愛護若名歌勝鬨」(寶曆六年)などのやうな諸作が生れ出るのであるが、要するにこの系統のものに於ては、二條清平の子愛護若が繼母の戀を拒絶したために父に讒せられて家を追放され、身の置き處なきまゝに大津濱に入水したが、山王権現の利益によつて助かるといふのが主想である。この繼母繼子の道ならぬ戀、それは例へば「都の富士」などの構想のやうに不自然の結婚の爲に犠牲となつた名目上の繼母が、若き繼子に對して自然の人情に萌す戀となつて顯れてこゝに悲劇を醸すといふ風に脚色されると頗る意味のある作柄となるのであるが、本曲のやうにそれが計略であつたと知れては技巧の弊を苦笑せずには居られない。因に愛護若系の淨瑠璃については、本名作集上巻「愛護若母箱」の解題御參照を乞ふ。

尙本曲構成の大切な一素材となつたものとして見通すべからざらば「ふたはれいじんあづまのひながた莠伶人吾妻鎌形」である。これは享保十八年七月十六日から豊竹座で興行されたもので、作者は並木宗輔・向丈助の二人である。前に述べた義太夫正本の「弱法師」の書替物である。北條貞時が先祖時政の法會に高安通俊の子俊徳丸に萬秋樂を舞はせようとした處が、高津兼則の子次郎丸が之を妬んで、俊徳丸を欺いて毒酒を飲ませて癩病患者とし、又己の舞

樂の師淺間左衛門をして俊徳丸の師富士右京を暗殺させて萬秋樂の祕書を奪つた。俊徳丸を戀して居た右京の女初花が、寅の年月日揃つた生れである故に、自ら胸を割いてその生血を俊徳丸に飲ませたので、さしもの難病も平癒して、忠臣と共に悪人を滅すといふ筋であるが、この中で、第一段の住吉の濱邊の汐干狩の場で俊徳丸が毒酒を飲まされる場と、三段目切の天王寺の場で初花が生血を俊徳丸に飲ませる場とは合邦辻に影響を及して居る事を見通してはならぬと思ふ。

また合邦内の段で玉手御前が兩親の許へ辿りついて、戸外から母を呼んで「こゝ明けて」と叩く條は近松の「傾城島原蛙合戦」の三段目手塚浪宅の場で、娘の更科が立歸つて戸外から兩親を呼ぶのを父は紛らさうとして讀經し、母は明けて入れようとしておせる場面からの脱化である。

### いと さくら 本 朝 育

安永六年三月十一日から江戸の外記座(座本豊竹新太夫)上場。作者紀上太郎、補助達田辨二。

元祿十七年(寶永元年)三月刊行の「落葉集」卷四、古來中興當流踊歌百番中の六十六に「絲屋娘節」と題して次の歌が載つてゐる。

二上り本町二丁目をとん／＼とん／＼とことん、とことん／＼とんとことん／＼通りたうはないが、絲屋娘は廿一二十、やつしつし／＼、姉に望みは少しもないが、妹見る目はしんとろ／＼とんと、親を見る目は猿眼え、さる／＼さる／＼猿眼えへ姉に望み返し

これが「姉は廿一妹は二十」と角書をつけた「絲櫻本町育」の原據となつた歌であらうと思ふ。この歌で本町二

丁目といふのは江戸であらうが(大阪にもある)、この歌の主として歌はれたのは上方であらう。處でこの絲屋の姉娘をお房妹娘を小糸と呼び、相手の男を左七といふに至つたのはいつからの事か、實説にはかう呼ばれた人物があつたのを、歌にはその名が出なかつたものかも知かでない。而して管見の範圍ではこの歌の想が元となつて始めて淨瑠璃に仕組まれたのは、宮古路豊後の正本「二世の組帯」である。これは七行十六枚(異版十三枚)の短篇であるが、これだけのものと思はれる。版式から見れば、享保末か元文頃かと考へられる。荒筋はかうである。

本町二丁目の絲屋の姉娘おふさに親類から左七といふ掣を取つて兩親は淺草邊に隠居した。處が左七は妹の小糸と深い仲となり、遂に連れ立つて家を抜出ア小石川の駒込の裏借屋で手鍋を提げる暮しをする事となり、相借屋の人々に宿酒を振舞ふ。長屋連中はいゝ氣に酔つて騒いで引上げた跡へ左七の父(おふさの伯父)が

本町二丁目二世の組帯  
糸巻の息女  
宮古路豊後

比  
むうのふ村をたふし出てきねむる  
いさよのよめをねむる三津のその  
あな町二丁目糸巻の姉おふさ妹お房  
かきかきして一掣をとりあふさの舞  
ふは浅草邊に隠居してはなすおふさ  
は長屋連中いゝ氣に酔つて騒いで引上げた跡へ左七の父(おふさの伯父)が

目を泣きはらしたお房をつれて尋ねて来た。左七はあはてて小糸を炬燵に隠して二人に應對して（重井筒の格）、小糸は御殿女中にやつたから、思ひ切つてお房と添ふと言つて一先づ二人を歸した跡で、小糸と共に、山の奥でも添ひとげよう、それが出来なければ心巾して未來で添はうといつて又こゝを出るといふ筋である。

歌舞伎では寶曆六年春市村座「草需さうきまつ會ご我が橋はし」の二番目に絲屋姉嬢おふき菊次郎、妹小いと糸太郎、左七菊五郎の役割で演じて居る。

この次に出たのが本曲である。荒筋を言へば次のやうである。赤城家の臣神原左五郎は悪人山住五平次に主家の重寶定家筆小倉の色紙を窃取された責任者として浪人となり、それを搜索するために吉原で幫間左七と名のつて居る。そして本町二丁目の中根屋綱五郎の人物を見込み、その馴染の遊女三浦屋の花咲が五平太に身請されようとした場を救ひ、それを縁に綱五郎に一身上の大事を打明けて助力を頼んだ。綱五郎は姉お房の聲として左七を入れ、自分は係累を遁れて命づくで色紙を奪還する

右此本者依小子之懇望附秘密音節之口傳等具相託遂校合令調板者也

宮古路曲豊後

宮古路宮古路大輔  
宮古路宮古路大学  
宮古路宮古路官八

和歌院門外石橋上町

江崎屋源吉板

本町二丁目の中根屋

綱五郎に

附 興 同

覺悟を極めた。處がお房と左七との祝言の翌日お房の妹小糸は養家から戻された。この小糸は赤城家へ出仕中に左五郎と私通して懐胎したのでお暇となり、養父の手から更に實家へと渡されたのである。左七と小糸は奇遇に驚くと共に相携へて出奔し、小石川に潜んで居たが、結局綱五郎の力によつて色紙も手に入り、一同世に出て日出たく納る。八冊物で、淺草地内の段、赤城屋敷の段、吉原仲の町の段、本町糸屋の段、道行妹脊の組糸、淺草駒形の段、下總行徳の段、小石川隠家の段に分れて居る。この中二冊目の赤城屋敷の段は尾上岩藤の詰開きの原作であり、行徳に於ける岩藤の花咲松葉いぶしは照天姫の松葉いぶしのやつしてある。小石川の段は前に擧げた宮古路豊後の「二世の組帯」によつて居り、長屋振舞の條の書出しは同文である。

本曲の上演と同じ安永六年三月から江戸の肥前座に於て同じく小糸佐七の淨瑠璃「江戸自慢戀商人」を出して居る。作者は友三郎・鬼眼の二人である。「本町育」には正本に三月十一日とあるのに、この方は只三月とあるのみで日附が無いので、その作られた前後に迷ふが、雙方を讀み較べて見れば「戀商人」の方が後で、「本町育」を雛案して俄作りにした事は明かて、作柄も遙かに劣つて居る。

本曲は同じ安永六年秋中村座で「本町育浮名花笠」と題して演じられた。主なる役は左七三五郎、小糸いろは、おふさ里好、綱五郎廣次、母三津五郎、十兵衛長十郎、五平太津太右衛門。

書替物としては、鶴屋南北と二世櫻田治助との合作「心こゝろのなぞ謎さけてしら白さ糸」が文化七年正月市村座で上場された。これが有名であるが、その他にもいろいろあり、殊に「江戸育お祭佐七」は名高い。

作者紀上太郎 南家三井の主人。名は治郎右衛門高業、字は公勒。鯛屋貞柳の門下で仙果亭嘉栗と號し、別に四貫・山平等の號がある。浪華に生れて江戸に出た。和漢の學に通じ、書畫をよくし、狂歌に堪能であつ

た。幕府の爲替用達を勤めて江戸駿河町に住んだ。組上太郎と號して淨瑠璃を作つた。その中では「志賀敵討」「糸櫻本町育」「碁太平記白石嚙」などが知られてゐる。寛政十一年四月歿す、年五十三。

新版歌祭文

安永九年九月廿八日から竹本座上場。作者は近松半二。

お染久松の情死事件の實説やその戯曲の系統については、既に本名作集上巻「袂の白しぼり」の解題の條下に述べて置いた。本曲はその「袂の白しぼり」及び改作たる「染模様妹背門松」を粉本として作つたもので、半二の作中でも名高いものである。半二は原作に於ては單に野崎村の百姓久作の子となつて居る久松に對して次のやうな素生を持たせた。

和泉の石津の家臣で千五百石取の相良丈太夫は主君の重寶吉光の短刀を預つて居たのを盜まれたので、阿房拂に逢ふのが無念さに切腹してその家來三平が介錯し、三平は追腹を切つた。その時丈太夫には六つになる孤兒があつた。三平の妻でこの兒の乳母であつたお庄は、その兄である野崎村の久作にその兒の養育を頼んだ。久松と呼ばれたその子は十歳の年行儀見習のために大阪瓦屋橋の油屋へ奉公に行つた。久作は後妻の連れ兒のお光と久松とを夫婦にさせようと思つて居た。久松を兄に托したお庄は吉光の短刀を手に入れるを條件として、主家再興を月々に家老に歎願して刀の搜索に憂き身をやつして居る。

かういふ境遇にあつた久松が父の横死後十三年目の暮にお染と情死する事件を脚色したのが本曲である。原作よりは背景が複雑であり、出て来る人物の間からくりの糸がそれからそれへと引掛けられて居つて、

半二式の技巧澤山の世話物の特長が最もよく出て居る作である。場面としては野崎村の段が勝れて居る事は  
いふ迄もなく、こゝには半二の舞臺藝術家としての手腕が最もよくあらはれて居る。

佐川魚鷹の改作した「増補新板歌祭文」(文  
化元年八月十五日)は筋立も文章も相違して  
ゐる。

伊賀越道中雙六

天明三年四月廿七日から竹本座興行。作者  
近松半二・近松加作。

寛永七年七月備前岡山の家士渡邊數馬の弟  
源太夫は川合又五郎主従四人のために殺され  
た。又五郎は江戸に逃れて旗本の土久世三四  
郎・阿部四郎五郎等庇護の下に他國に潜んで  
ゐた。一方源太夫の兄渡邊數馬は、大和郡山  
に仕へてゐる姉婿荒木又右衛門と謀り、又右  
衛門は仕官を辭して數馬と共に又五郎の踪跡を尋ねた。而して遂に寛永十一年十月、又五郎が伯父河合勘左  
衛門の妻子の居地奈良に入り、十一月奈良を出て江戸に下る事を知り、伊賀上野小田町に要蹊して又五郎を



紙表紙車馬「羽合掛乘越賀伊」



始めとして、河合勘左衛門及び姉婿櫻井半兵衛等二十人を討つて多年の望みを達した。これが徳川實記・徳川太平記などに見える伊賀越の敵討の概要である。

而してこの敵討が後に戯曲に仕組まれるに及んでは、弟の敵を討つのを父の敵を討つ事とし、忠臣蔵と曾我兄弟と併せて天下の三大敵討と呼ばれるに至つた。

始めて劇に仕組まれたのはいつか明かでないが、寛保元年江戸の市村座で「敵討三組盃」と題して、この伊賀越と赤穂義士復讐と巖柳島とを取合せたのなどは古い方であらう。淨瑠璃では安永五年八月一日から江戸の外記座で興行した「志賀の敵討」が始めらしい。これは紀上太郎の作で、伊賀越に芭蕉が俳諧に身を捧げるに至つた動機を取合せた作である。備前生田侯の家臣渡邊數馬太夫が瓦井有鱗同政五郎の爲に暗殺されたのを、數馬太夫の遺子東之助が、あら、き又右衛門の助太刀の下に江州志賀の濱邊で復讐の素懷を遂げた。折しも兄の敵として瓦井を尋ねて來た松尾藤七郎は、渡邊に先んじられたのを見て、大小を捨てて芭蕉と改めて俳道に入り、家來の寶井晋介も亦其角と改めて弟子となるといふ筋で、荒唐無稽を極めて居るが、伊賀越を素材とした事は明かである。

同じく安永五年の十二月二日から顔見世狂言として大阪中の座に於て「伊賀越乗掛合羽」が上場された。奈河龜助の作で非常に好評を博し、四月十八日迄興行を續けた。この大當りを見て北堀江の豊竹此吉座では、近松東南がこれを淨瑠璃に仕立てて、同じ外題を以て興行した。この正本は十冊に分れて次のやうに見出しをつけてある。第一鎌倉山の櫻がりに大名の劔鋏(東山櫻狩の段)第二正宗の名作に恩を讐なる非道の心(行家屋敷―股五郎の行家殺し、八丁駿松原)第三上杉の出陣に立雛の御上使(上杉館の段―秋定出陣)第四圓覺

寺の會合に茶の湯の祝言(圓覺寺の段)第五道行胡蝶の猫、第六木辻の居續けに御意打の饑別(木辻の揚屋—響田内記政右衛門に助太刀を許す)第七般若坂の隠れ家に身代りの妙藥(般若坂癩病村に於ける股五部の醫者殺し)第八長町宿屋に磨立みがきたた眞珠の貞心(長町傳法屋の段—お袖身賣、靜馬眼病平癒)第九借座敷の晦つごもり日蕎麥は打つて替へた貞女の諫言(伏見の櫻田林左衛門旅宿、股五郎女房おその夫に意見して自害)第十千秋萬歳樂叶うたりな敵討。

この乗掛合羽は操りでも受けて後にも度々繰返されて居るが、本曲の初演より七年後に於て近松半二はこれを土臺として「伊賀越道中雙六」を作つたのである。

これも十段から成り、第一鶴が岡の段、第二行家屋敷の段、第三圓覺寺の段、第四郡山宮居の段、第五郡山屋敷の段、第六沼津の段、第七關所の段、第八岡崎の段、第九伏見の段、第十敵討の段に分れて居る。而して雙方を比較して見

尚宮上野の櫻乃以難波乃拂曲  
 七三言とりて極も至る可なりとさるの  
 草花の権を移れしを櫻と忘れぬ  
 伊賀の狐を全けの身寄いりしをこ  
 ちやうといふはなはだの權乃をさる  
 福壽乃を城む之一刻千重の  
 大依も美ましとの由をまん由男  
 名柳の二子小孫をいふも情以度  
 を移しし名をを造りし中もなき向

伊 其 題 案



ると見られ得る。本曲も好評で、直に歌舞伎にも入り、同じく天明三年九月十三日から大阪中座で興行され、爾來三都の劇壇を賑はすに至つた。

乗掛合羽と道中雙六とは操芝居でも相並んで時々繰返されたが、文政元年四月五日から堀江市の側の操芝居で「伊賀越乗掛合羽」の外題で般若坂までは原作の場割りで、そのあとへ沼津、關所、岡崎、伏見、敵討を道中雙六の方から取つて演じて居る。即ち外題は乗掛合羽であるが事實上兩作の接合はこの時に行はれたのである。それが文政七年八月稻荷の文樂座での興行には外題も「乗掛合羽道中雙六」と割書にして「伊賀越」と題して居る。後には「伊賀越乗掛合羽」の代りにこの外題が操では長く繰返された。尤も「伊賀越道中雙六」の外題でも繰返されるが、これでも、内容は乗掛合羽とのつき合せになつて居り、時によつて場割りに多少の相違はあるが、上杉館や般若坂は大抵の場合に加へられたやうである。但し今日ではまた道中雙六の本筋に歸つて居る。

### 伽羅先代萩

天明五年正月江戸結城座上場。作者松貫四・高橋武兵衛・吉田角丸。

有名な伊達騒動を仕組んだ戯曲中最も名高いもので、今尙舞臺生命を有する作。

伊達騒動を始めて劇に演じたのはいつからか明かでない。渥美清太郎氏は延享元年五月市村座に上演された「開爾今川狀」ではないかと言つて居られる。年代記の役割を見ると山名宗全・赤松彈正・歌舞伎の座元お國祇園のお梶・關取雷鉄之助などが出、又二番目に累與右衛門が仕組まれて居るのによれば如何にもさうらしく

思はれるが、筋が分らないので断言は出来ない。次に延享三年十一月森田座興行の「大鳥毛五十四郡」もさうだといはれるが、やはり筋が知れない。降つて安永元年七月森田座興行の「けいせい紅葉襦」は芝居年代記に伊達騒動の狂言なりとある通り、伊達騒動を信田の世界にして女清玄を取合せて仕組んである。信田左衛門(富士郎)が綱宗、澤田縫殿(團十郎)が直則、この縫殿が實悪で大出来であつた。そして清玄を取入れた二人淺間では、淨瑠璃は富士岡若太夫等の地で、清玄亡魂團十郎、高尾幽魂中村のしほで、これも大當りであつたといふ。

上方に於ては、明和四年正月廿日から大阪中座で興行した並木十助の作「けいせい陸玉川」が名高いも

ので、近江の佐々木騒動の世界になつて居る。次いで安永六年四月廿日から「伽羅先代萩」が上演された。作者は同座のこの前の當り狂言「伊賀越乗掛合羽」を書いた奈河龜助であつた。「奥州秀衡跡目争論」と角外題を置

伊達競阿國戲場 作者鳥亭馬

今来有徳橋と密作て不無悲とて  
 一色(満)夜(團)成(氣)成(海)星(若)橋  
 名劇(家)玉(あ)ら(ゆ)き(と)唐(か)の(た)ら  
 家(大)徳(島)利(八)の(成)義(満)の(清)  
 仁(文)波(有)の(島)の(海)来(中)年(の)ま  
 中(ま)の(世)の(為)の(の)の(勞)持(の)茶(道)

正長元年 [伊達競阿國戲場]

いて、世界を賴朝時代とし、梶原景時(酒井雅樂頭)に中村歌右衛門、秩父重忠(板倉内膳)に中山文七、常陸坊海存(原田甲斐)淺尾爲十郎、伊達治郎秋衡(伊達安藝)中山來助、泉小次郎親衡(片倉小十郎)中山文七、乳母政岡中山來助、榮御前中村治郎三、沖の井花桐豊松、八汐桐山紋治といふ役割で、九段續であつた。而して今日のものとは相違するが、この作に於て始めて政岡の飯焚きから床下が出來たのである。

この作は大好評で四月から六月迄打續け、そして翌安永七年京都の竹本春太夫座に於ては、これをそのまま淨瑠璃に仕立てて御殿の場迄院本として出版したと西澤一鳳の傳奇作書殘篇中に見えて居る。

處が江戸では安永七年の秋中村座で、櫻田治助の作「伊達競阿國戲場」が上演された。これは應仁記の世界に累與右衛門を取合せたもので、足利頼兼を綱宗に、山名宗全を酒井雅樂頭に、仁木彈正を原田甲斐に、渡邊民部を伊達安藝に、荒獅子男之助を鐵之助にあてて脚色して居るが、それには飯焚はない。この作を烏亭焉馬・達田辨二・吉田鬼眼の三人が淨るりに仕立てて、同一の外題で安永八年から江戸の豊竹東治座(肥前座)で興行した。三つ目の伏見京橋の絹川谷藏高尾殺しの場は、今日行はれる花水橋の藍本である。又この作では累與右衛門の筋が却つて名高くて四つ目豆腐屋、八つ目垣生村、九つ目土橋の段等は今でも残つて居る。

以上に列舉したやうな種々の作のあとに出たのが、こゝに收めた淨るりの「伽羅先代萩」であつて、要するに上記諸篇の影響を受けて居るのであるが、殊に歌舞伎の「伽羅先代萩」に依つたもので、やはり賴朝時代の世界である。只残念な事には、京都の竹本春太夫座に於て淨るりに仕立てたといふ院本の現存する事を耳にしないから比較し得ないが、本曲が、京都及びその附近殊に江州などを主要な場所としてをるのによつて見れば、江戸作者の手によつて創作されたものではなくて、上方系のものに多少手を加へたに過ぎないもので、

大體に於て歌舞伎の「伽羅先代萩」が淨るりに仕立てられたものと考へられる。場割りはいへば、第一舟岡山、蹴躑山、第二伊達義綱上屋敷門外、第三貝田屋敷、第四浮世渡平住家、豆腐屋、第五近江堅田浦道行、第六御殿、第七明衛屋敷の上使、第八定倉屋敷、第九對決となつて居る。この中では第六の御殿が最も名高く、後に操りて繰返される場合にもこの場だけが出るのが普通で、全體を出した事は稀である。而して全體を出す場合には「阿國戲場」の殖生村の段や土橋の段が取合せられた例もある。尤も御殿の段と雖も、今日歌舞伎で演じられる床下のある勝れた場面は、淨るりから歌舞伎に入つて、名優等の工夫によつて大成されたものである。

### 近頃河原達引

正本に二種ある。一は天明五年五月五日から江戸肥前座に於て興行された時のもので、作者として爲川宗輔・筒川半二・奈河七五三助の名を連ねてゐる。他の一は同年九月九日の刊行で、中村重助再撰とあり、卷末に豊竹八重太夫が天明二年道頓堀中の芝居に於て語つた時正本を出し得なかつたのを今出版するといふ旨が記してある。内容は同一である。又一説には作者として近松半二を擧げて居るといふやうな次第で、成立についても確説がない。

のみならずその原據についても疑問があつて、解題者にとつては厄介な淨瑠璃である。松村操の實事譚のおしゆん傳兵衛の實説によれば、京都鳥部山日蓮宗本壽寺の境内におしゆん傳兵衛情死の墳墓がある。而して二人の情死は元文三年十一月十六日の朝の事で、男は釜座姉小路下ル吳服屋井筒屋傳兵衛、女は川端四條









上ル先斗町近江屋金七抱へのおやまお俊といふもので、傳兵衛はお俊を受出す金もなし、縁も切り得ずといふので聖護院の杜で心中したのである。而して「河原の達引」と題したのは、同年十一月十三日徳大寺家の家來中村水と下部晋吉及び久我家の家來秦野伊織との三人が四條東の芝居見物に行き所司代の下部五人と芝居歸りに河原で喧嘩刃傷に及んだ事を取合せたからであり、又猿廻し與次郎といふのは、東堀川一條上ル富田町の丹後屋佐吉といふ猿廻しが盲目の母親に孝養をつくして同じく元文三年九月廿七日に其筋から表彰されたのを、享保の末に名高かつた叩きの與次郎の名を借りてお俊の兄とし、この三事件を取合せて「近頃河原の達引」と題したのであるといふ。

併し元文三年の事件を四十八年も後の天明五年に仕組んで「近頃」といふも随分間の抜けた事である上に、お俊傳兵衛の情死事件は既にこれより以前に人口に膾炙された名高い巷説で戯曲にも作られてゐるのであるから、よしや前記のやうな情死事件が元文三年にあつて、それが本曲構成の一素材となつたとしても、念のために一應古いお俊傳兵衛の情死事件について顧る必要があらう。

享保三年京夷屋座興行の「おしゆん傳兵衛十七年忌」を以て假りに二人の心中の正當の十七年忌を當込んだものとして造算すれば、その心中は元祿十五年の事となる。蓋し二人の心中はその頃の事であつたらう。寶永元年刊行の「心中大鑑」の「東河原は夜明けの紅」と題する米屋庄兵衛と八百屋おしゆんとの心中の話は、歌祭文の「二條河原心中」にも綴られて居る。おしゆんと庄兵衛は深く契つて居たが、おしゆんの母親がお俊を金で賣る事となり、庄兵衛はそれに對抗するだけの金力がないので二人は連立つて卯月五日二條河原で心中するといふのである。この筋は歌祭文の「京おしゆん傳兵衛心中」と同一であつて、米屋の庄兵衛が米屋の傳

兵衛と變つて居るだけである。雙方を比較して見るに、「二條河原心中」が原作で、これに少し手を入れたのが「おしゆん傳兵衛心中」の歌祭文で、違つた種によつて出来たものとは考へられない。都一中の正本に「おしゆん傳兵衛河原心中」といふのがある。外題年鑑に見えて居るが未見であるから斷言は憚るが、恐らくはこの歌祭文を材題として綴つたものであらう。次に「おしゆん傳兵衛十七年忌」も亦件の歌祭文が素材となつて、これに多少の技巧が加へられたものである。即ち筋は極めて單純で、糸屋の手代傳兵衛は堀川邊の裏借屋の後家の娘おしゆんと契つて居たが、朋輩の彌兵衛の奸計にかゝつて主家重代の刀を盗んだ濡衣をきせられた上に、お俊は母の一存で傳兵衛の實父と實兄との爲にその仕へて居る阿波の殿様に買はれて行く事が分つて進退に窮し、二條河原で情死を企てたが未遂のまゝで人々に救はれると

▲おしゆん傳兵衛  
**好女縁合柱三卷**  
 傳 糸屋の重代の娘おしゆん  
 傳 彌兵衛の奸計にかゝつて  
 傳 主家の刀を盗んだ濡衣をきせられた  
 傳 上に、お俊は母の一存で傳兵衛の實父と實兄との爲にその仕へて居る阿波の殿様に買はれて行く事が分つて進退に窮し、二條河原で情死を企てたが未遂のまゝで人々に救はれると

▲おしゆん傳兵衛  
**十七年忌**  
 傳 糸屋の手代傳兵衛は堀川邊の裏借屋の後家の娘おしゆんと契つて居たが、朋輩の彌兵衛の奸計にかゝつて主家重代の刀を盗んだ濡衣をきせられた上に、お俊は母の一存で傳兵衛の實父と實兄との爲にその仕へて居る阿波の殿様に買はれて行く事が分つて進退に窮し、二條河原で情死を企てたが未遂のまゝで人々に救はれると





三國志〔享保四年〕出雲の「出世しゅつせ握虎やつこ雜物ざぶつ語ご〔享保十年〕等を始めとして、淨りだけでも十數篇に達する。殊に明和以後操芝居の衰頹期に入り、新作淨りりの振はない時代になつては、敵討物と大閤記種の物とが目立つて多くなつた。その大閤記種の多くの作品中最も世に知られて居るのが本曲である。

本曲はその題名の示す通り、讀本の「繪本太閤記」によつたものである。本書は岡田玉山が寛政九年から享和二年に亘つて完成したもので、文化元年に絶版を命ぜられたのであるが、まだ完結しない間に、特に光秀の弑逆事件を中心とした前後の事柄を素材として脚色したものである。即ち武智光秀は主君小田春長に妙國寺の蘇鐵を返すやうにと諫め、又龍臣森蘭丸と争つた爲に春長より散々に侮辱された積憤抑へ難く、遂に意を決して本能寺を襲うて春長父子を弑した。中國に出征して高松城水攻中の眞柴久吉は安國寺惠瓊、城將清水宗治の妹玉露等の力によりて郡家と和し、軍を旋して主君の弔合戦をしようとする。妙心寺に在つた光秀は母の皐月の苦諫に心を動かされて自害しようとしたが、四王天但馬に諫止されて久吉と戦ひ慘敗して小栗栖土民の竹槍にかゝつて命を殞すといふ筋を六月一日から同十三日に分けて十三冊に仕組んで、それに別に發端蘇鐵の諫言を添へてある。

その中では二冊目本能寺の段、五冊目高松城水攻の段、六冊目妙心寺の段、七冊目孫市切腹の段、十冊目尼ヶ崎の段等が勝れて居て世に知られてゐる。殊に誰でも知つて居る夕顔棚の尼ヶ崎の段は、近松の「用明天皇職人鑑」の第二段目佐渡の兵藤太内の段に於ける母の身代りの趣向の雛案である。

本曲の人物としては光秀の母や妻子はいづれも世の義理人情に照して同情される人柄であるが、それ以外に於て、小田春長は暴君であり、眞柴久吉は智勇兼備の天成の名將として扱はれて居るに對して、主人公た

る光秀は特に光つて居る。作者にそれ迄の自覺があつて作り上げたものかどうかは斷言し得ないが、頗る色彩を異にして居る。といふのは、武智光秀といふその姓名が表象するやうに、彼は仁智勇兼備の立派な人物であつたが、暴君のためにその武將としての面目を蹂躪されて感情を極度に激怒させられたので、自覺しつつもとうとう逆賊の汚名を受けるを餘儀なくさせられるやうになつた。そして遂に運命と道義とに殉ずるといふ風な、いはど頗る近代的の悲劇の主人公たる素質を有する人物として描き出されて居るのは、動ともすれば類型に墮する院本の人物中に於て頗る異彩を放つて居るやうに思はれる。

(をはり)

昭和三年十二月